
就活の息抜きに書いた小説を載せてみる

殺人貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

就活の息抜きに書いた小説を載せてみる

【Nコード】

N7476Y

【作者名】

殺人貴

【あらすじ】

就活の息抜きに書いた小説を載せていきます。

幻影少年は現代ファンタジー。その他はスチームパンク分が入ります。

この作品は、文章力や小説作成スキルのアップ、そして他者からの意見がほしくて書いてみたものです。故に「こうこうこうしたほうがいいんじゃない？」など、何らかの声を聞かせていただけると

非常に嬉しいです。

筆者はいろんな小説やゲームに影響されます。書く前に見たもののパクリにならないようなるべく変化させて書いてますが、もしかしたらパクリっぽいところもあるかもしれません。もしも何か気づいたら、遠慮なく指摘してください。改訂いたしますので。

序章 死

【某日】

【深夜】

【某所】

それはどこなのか。夜の暗がりに支配された空間。

よく目を凝らすと、窓がある。その間際に置かれたベッドに横たわる人影は、窓から外の景色を眺めている。

窓の外には永遠の黒。漆黒の夜空。

今、その空に、一筋の白光が。

一瞬後には、無数に。閃光が、奔って。

……無数の、流星群が

【某日】

【一二時五六分】

【街頭テレビにて】

『さて、ここ数日に渡り見られている無数の流れ星ですが』

ナレーターは言葉をいったん切り、美しい動画を流し始めた。画面はそれに変わる。

青い空に、白い筋が形成される。それも、いくつも。

『これだけずっと流れ星が出るなんて、考えられないことです。なんらかの災厄の前触れなのではないかと、ネット上では活発に意見が交わされています』

それはそうだ。いくらなんでも、ずっと流れ星が出るなんてあり得ない。

『さて、そこで今日は天文学の権威をお呼びしています。イエール大学教授、オクタヴィアさんです』

そして、その場に恰幅かっぶくのよい女性が現れる。

【六月二二日】

【二三時三三分】

【某所】

静かな、静かな夜だった。風すら息を潜めているほどの静寂。物音ひとつしないこの世界で、不意に、咳き込む音が響いた。

「げ、は……、が……っ」

いったいどのような事故にあったのだろうか。その人影の腕は無残にも焼け爛れて皮膚が捲れ上がっている。胸元には氷柱が幾本も突き刺さっており、刃物でも使ったのか、深い切創せうそくが無数に刻まれている。露出したピンク色の筋肉は呼吸と共に収縮、弛緩を繰り返しているのが如実にわかる。

……それは、少年だった。

またひとつ、少年は咳と共に血塊を吐き出し。少年の眼前に悠然と佇んでいる青年を、地面に背をつけたまま忌々しげに睨み付けた。「まさかこれほど粘るとは。……少々、我々の力を過信していたようだ」

青年は少年から目を離し、周囲を見渡す。

そこかしこには、少年によって殺されたのであろう死体が地面に転がっていた。

ぱつと見ても一〇は超えているであろう。月が闇に喰われ尽くしたこの夜では、正確な数を数えることは叶わない。

だが、どういう殺害方法をとったのだろう。暗がりに浮かび上がるそれらはみな急所を一撃で破壊されている。これほどの人数に襲われたのなら、そんなこと出来ようはずがない。

再び少年に視線を戻すと、青年は少年にこう話しかけた。

「凄まじい能力だな。おとなしく我らに従えば、貴様のその能力を有益に使役してやったものを……」

「ぐ……、」

少年は自身の《能力》を発動させる。

その瞬間、世界中に満ちる、白き糸。

それを繰る、死神めいた漆黒のヒトガタ。

だが少年は、能力を発動させたはいいが、もう身体を動かすことは出来なかった。どんなに青年の首筋にナイフの刃を奔らせようと試みても、壊れた己の肉体は指一本たりとも動くことはない。

「惜しいな。実に惜しい。なあ、水月故^{みなづきゆえ}」

故と呼ばれた少年は、もう返事を返すことすら出来ない。

そんな故に向けて青年は右手を向け、

「それでは、さよならだ」

その手の平から、風が奔った。

人間が風を操るなんて、普通なら信じられないだろう。道具を使っていないのだ。

されど、たしかに。圧縮された空気の塊は、故に向けて放たれた。
鎌鼬カマイタチのような形状ではなく、ウォーターカッターのように敵を貫
かんとされた形状。

それは故の胸をたしかに貫き、なおも勢いを緩めずに背中越しの
地面に深い穴を作りだした。

故の胸からおびただしいほどに血が流れる。

身体中から力が失われていき、意識も遠退とおいいていった。

もう、死が近い。

死神の鎌が首筋に当てられているのを感じながらも、しかし故は
もう断罪の瞬間を待っていることしかできない。

自分の呼吸音すら遠く聞こえる。

（助けて、騎士様……）

幻聴すら聞こえてくる。あまりの痛みで痛覚が麻痺した故は、あ
きらめの境地に不思議と笑いが漏れた。腹の底から。それは自身の
情けなさだけでなく、幻聴すら耳にする自分に対しても。

視界が暗くなっていく。闇の手が臉を覆っていく。そこには体温
も感触もなく、ただただ虚無のみが支配している。

（助けて……騎士様、あたしの騎士様……助けて……）

そんな、声が。

意識が断線する直前、聞こえた気がした。

そして、ついに。

故は、

死んだ。

第一話 憑依

瞼越しに感じられる光の刺激に、故は目を覚ました。

寝起きで未だ鈍い頭のまま、重い瞼を押し開く。

そのまま天井をしばらく見つめていると、ようやく頭が働いてきたようだ。

「ここ、は……？」

自分が死んだのをしっかりと認識していたはずなのに、なぜかまだ生きている。

視界に映るのは、見知らぬ天井。真っ白に浄化された、穢れなき色をしている。自分にはあまりにも不釣り合いなその色合いは、自身を処断しようとその顎^{アギト}を開いて圧迫しているかのようにすら感じる。

何が起きたのかわからない。まさかあの連中が自分を助けることはいないだろう。現に従わなかった自分へ刺客を送ってきたのだから「たしかに、胸を貫かれたのに……」

最後に放たれた風の槍が穿った胸を右手で撫でる。

包帯が巻かれているのであるうと考えていたが、実際には何も巻かれておらず、しかも傷跡が残っていないことに、故は驚愕した。

わからない。何が起きたんだ？

なんらかのことが起きて、奴らは俺を助けたのか？

頭を悩ましてみる。だけど答えは見つからない。

そんなことをしていると、ぐう……、と腹の虫が鳴いた。
「腹減ったな」

とりあえず何か食べ物はないかと周囲を見渡す。

おそらくここは病室なのだろう。死にかけていた……いや現に死んだはずの自分が運び込まれるところなど、病院しか思い浮かばない。

死んだはずの自分が生き返ったのは、何かそういう能力を持っているものに偶然助けられたのだろう。きっと。

視線を廻らす。病室にフルーツ盛りがあるのは当然だろう。そういう固定観念を、故は抱いているから。

フルーツ盛りはベッドの横の机の上に置かれていた。他に食べ物が見当たらないため、それに手を伸ばす。感覚的に届くと思ったのだが、しかし実際には届かなかった。

「くそっ」

忌々しい。なぜ届かないんだ。これじゃあ、わざわざベッドから降りて近づかなきゃいけない。

それにしても。距離感を測り間違えるなんて、やはりまだ調子がおかしいようだ。測れないようじゃ、今まで生きてこれなかっただろうに。

もう一度、舌打ち。そしてベッドから降りてフルーツ盛りに手を付けたとき、窓硝子の向こう側に美少女が見えた。

腰まで伸びた美しい白髪。だがそれは老人のようなそれとはまったく違い、雪のような純白。見ようによっては銀ともなるのではないだろうか。

ぱっちりとした双眸。眼球は血のような紅 いや、それよりももっと美しい。まるで炎のような^{あか}赫。

故と同年辺りだろうその相貌にはまだ幼さが残っている。そんな美少女が目の前にいたら、やることなど決まっている。

「おっ嬢さあゝん、俺だあゝ！ 一発犯らせてくれえゝ！」

少女に飛びかかった。

華麗な跳躍。審査員がいたら、満場一致で満点がもらえることだろう。

そして故は窓を突き破り

遙か下の大地へと自由落下していった。

「うおーッ！ 死ぬ死ぬ、マジで死ぬ！」

即座に窓際の塀に指を引っかける。

鍛え上げられているはずの身体。この程度では音を上げようはずもない。されど全体重の込められた指先はミシミシと嫌な音を上げている。

「どうしたの、故ちゃん！」

かなり響き渡ったのだろう。故の悲鳴を聞きつけて、ひとりの女性が無言で寄ってきた。

女性は死にかけている故を見た瞬間、絶叫をあげた。

「ちょ、故ちゃん！ 何やってるの！」

バタバタと慌てて窓に駆け寄り、故を引き上げる。

やはり先ほどまでの予想は正しかったようで、ここは病院のようだ。引き上げられながら見た女性の服装がナース服であることから、そう判断できる。

それにしても、いい女だ。小ぶりな胸は、片手で掴めそうなほど。憎悪の対象のひとりである母親がナースバディだったために、故は発育のいい女を嫌悪している。その逆の、いわゆる子供体型が好みだ。

故は荒い息を吐きながら看護婦を見る。自身が置かれている死の危険すら完全に頭の中から抜け落ちている。もう故の思考その他すべての感覚は看護婦に支配されている。顔はだらしく緩みきっている。

病室内にまで救出された後、故は緩みきった顔を引き締めると、きわめて真剣な表情で　そう、例えるなら戦場に赴く前の特攻隊員のような顔で、こう言った。

「ありがとう。あなたは命の恩人だ。あなたがいなければ、ぼくは死鎌をこの身に突き刺されていたことでしょう」

手を取り、両手で握りしめる。外見上は感謝の言葉を述べているだけであるが、しかし内心ではその手の柔らかさに鼻息を荒くしていた。

次第にそれだけでは満足できなくなった故は、「あつ……」とか言いながら、脚の力が抜けたかのように演出しながら看護婦ナースに抱きついた。

「あらあら……」

看護婦ナースは故を優しく抱きとめると、恐怖から解放させんと頭を撫でる。その優しさにつけ込んで、小振りな胸の谷間に顔を埋める。しばらくそうしていると、看護婦ナースは声音トーンを落としてこう言った。

「それにしても、本当によかったわ……。故ちゃんが元気になって」「ヴおういうことですが（どういうことですか）？」

胸から顔を離さず、訊ねた。看護婦ナースの香りを楽しみながら。

「故ちゃんはね、ずっと寝たきりだったのよ」

（……はア？ マジ？ だからこんなに肉体が衰えてるのか？ さつき指先が体重に耐え切れてなかったし）

看護婦ナースは頭を撫でるのを止めると、

「故ちゃんの担当の先生、伏岳院先生ふくがくいんに様子を診てもらいましょ？」
故の手を取り、歩き始めた。

看護婦ナースがドアをノックすると、はい、と返事が伝わってきた。

「失礼します、先生。故ちゃんが目を覚ましたので、診ていただきに来ました」

「ふむ」

椅子に座っていた白衣の男は、くると椅子を回転させてこちらを向いた。

「経過は良好のようだね」

「経過、ですか？」

「うん。故くんは大手術を受けたんだ。父親からの虐待によって傷を負ってね。その手術で身体にかなりの負担がかかって、一月ひとつきの間眠り続けていたんだよ」

父親の虐待って……俺は刺客にやられたんじゃないのか？

故の疑問を知ってか知らずか。伏岳院は聴診器を付けると、言葉を続ける。

「寝ている間にもう身体の方はすっかりよくなっているみたいだね、見たところ。念のため、聴診してみようか。……じゃあシャツをあけて」

言われるまま胸を見せる。勢いよく全開に開く。

看護婦は故の大胆な行動に驚愕した。でも男なんだから、これくらいは当然だろう。故はそう思い、首を傾げた。

伏岳院は手を動かしながら音を聞くと、うんうんと頷いて聴診器を外した。

「うん、問題ないみたいだね。これならもう退院しても大丈夫だよ」

「よかったわね、故ちゃん」

伏岳院の言葉に、看護婦は心底嬉しそうにそう言った。

それを微笑ましそうに伏岳院は眺める。

だがすぐに表情を引き締めると、伏岳院は口を開く。

「それで、これからのことなんだけど。故くんの父親はもう警察に捕まってるし、母親はそもそも故くんと父親を捨てて家を出て行ったらしいね。このままだとひとりで暮らしていくか、施設に引き取られるかのどちらかになるんだけど。故くんはどっちがいいかな？」

「はあ」

（何かおかしいな。うん、絶対におかしい。父親とか母親とか、そんなのはずっと昔に消えた存在なのに。なんで最近まですぐ近くにいたような言いぶりなんだ？）

そんなことを考えていた故の態度が、選択を決めかねていると感じたのだろう。伏岳院はこう提案した。

「まあ、まだ決めかねないか。とりあえず今日のところは私がタクシー代を出してあげるから、家に帰ってゆっくり考えてみなさい」

そう言つと、伏岳院は机の上の電話を取って、タクシー会社に連絡を取った。

看護婦は伏岳院にひとつ頭を下げると、故の手を引いて病室に戻

っていった。

故と看護婦^{ナース}が出て行くと、伏岳院は椅子に深くもたれた。ぎしり。軋み^{ガタ}が上がる。

一応うまくいったようだな。うん。もしかしたら失敗してしまっただのではないかと懸念していたけれど、杞憂^{きう}だったようだ。

「さて、と。カルテを書くか」

机の上に置かれたのは、故のカルテ。伏岳員は今日の診断結果を記述していく。

やがて筆が止まると、以前の診断結果から引用しようとしているのか、カルテを見返していく。
と、

「……記述されてない？」

おかしなことに気づいた。故が手術をしたということが書かれていない。

「……ああ、書き忘れか」

医師としてどうかという発言をすると、伏岳院は書き忘れた部分を記入していく。

そしてすべての作業が終了すると、

「……連絡くらいはしておくか」

カルテを仕舞い、受話器を手取る。呼び出す番号は、伏岳院の身体が邪魔^{まじ}をして伺うことはできない。

ブルル。コール音が幾度も鳴り響く。

五回目あたりで、“彼”は出た。

「もしもし。私、伏岳院実清^{さねきよ}だが」

普段通りの返答が返ってくる。簡素な、言葉少ないもの。

交流を持って日が浅い者なら頭に来るようなそれ。けどよく知る自分にはそれが普段通りのものだとなわかっていて、そのため、そんなことない。

「故くんが目覚めたぞ」

返ってきたのは、狂ったような嗤い声だった。

看護婦ナースが手続きをつつがなく終わらしてくれたため、即座に帰宅できることになった。

徒歩はまだ負担がかかるから、と。タクシーに乗って。もちろんタクシー代は伏岳院持ちだ。

（やばい、伏岳院がイケメンすぎる！ 奢ってくれるなんて。惚れちゃうかも。……いや、それはないな。うん。たとえどんなことがあると、男に惚れるなんてありえない。俺は幼女体型の娘こにすべてを捧げると誓っているんだからな！）

そんなことを考えてると、タクシーが停止した。目の前には一軒家が。

（でかい。一軒家って、普通は二階建てじゃないの？ 三階建てとか、マジ神がかってるだろ。庭も広いし。何より、木造建築ってところが男心をくすぐる）

いったい誰の家なのかはわからない。自分には関係ないであろうし。だが周囲を見渡すと、自分の家に該当するはずの家は、ここしかないことに気づいた。この家は結構な敷地面積を誇っており、タクシーの止まった位置からするとここしかありえないからだ。

「え、は？ えっと、ここがマジで俺の家？」

いやいやいや、ありえないぞ。かすれきつた古い記憶フィルムの中、家はもう売りに出されてたはずだ。借金取りが押しかけてきたし。それに何より、こんな家じゃなかったぞ。

運転手は面倒くさそうに舌打ちをすると、口を開いた。

「ああ、そうですよ。じゃあ早く降りてくださいね」

渋々と降りる。すると、一瞬の躊躇いもなくタクシーは急加速して走り去っていった。その姿には、誰しもが客商売としてありえないと口を揃えて言うだろう。

ポケットに手をつ込む。硬い感触が指先に触れる。タクシーに乗る前、看護婦^{ナース}から渡された鍵だ。

「まあたぶん伏岳院の家かなんかだろ」

いつまでもここで突っ立ってても仕方ない。溜息をひとつ吐くと、故は鍵を開けて中に入った。

ぎしィ……。

分厚い木の扉が開く。悲鳴を上げながら。

外光に照らされた内部。廊下には埃がうつすらと降り積もっている。しばらく掃除されていなかったからか。

足跡を残しながら足を進める。

適当に歩き回ると、二階にひとつの部屋を見つけた。ドアに『Yue』と刻まれた可愛いプレートがかけられている。

がちやり、とドアを開ける。

その瞬間、噎^むせ返るほどの血のにおいが鼻孔をくすぐった。懐かしい、本当に懐かしいにおい。もう慣れきった。日常のにおい。

でも、どうして。

この部屋が、こんなにおいを籠もらせているんだ？

疑問はすぐに解決した。わざわざ視線を廻らせなくても、視界に映る。

ベッドの周りに大量に配置されたぬいぐるみの群れ。それと、可愛い色の布団。

それらが、まるで帰り道にスクールにでもあったかのように濡れていた。本当にびしょ濡れ。……血で、濡れている。

相当前のものなのだろう。どう黒く変色し、パリパリに乾いている。

「これは……掃除しなきゃな」

常人なら動揺する光景。非日常的な。恐怖を催^{もよお}す。

だけど故にそれは当てはまらない。水を飲むのと同様、自然で当然の光景だから。故にとっては。

だから、なんの感慨も浮かばない。せいぜい、何があったのかは

知らないけど掃除くらいしておけよ、といったくらいにしか感じない。

もう使い物にならない布団を剥ぐと、ベッドの上に腰掛ける。ぎしり。スプリングが軋み揺れる。

するとベッドの横に置かれていた巨大な衣装鏡が目映った。

「……あれ？ おかしいな。目が疲れてるのか」
瞼を閉じ、目頭を揉みほぐす。

……うん。ありえない光景が移った気がするけど、気のせいだ。絶対そうだ。

脳裏に美少女映像を超高速展開し、心を穏やかにする。うん、やはりつるぺたはいい。人類の至宝だな。

まるで凧いだ大洋のように。まるで伽藍堂で祈りを捧げ悟りを開いたかのように。穏やかなる精神状態になると、ゆっくりと目を開いていく。

「……………」

ありえない光景はなおも消えず残っていた。

とりあえず右手を挙げる。鏡像も同じく右手を挙げた。

格好つけて前髪を、ふあさ……ッ！ と撫で上げる。鏡像も動きを模倣した。

ぶるぶる震えてしまふ。心からの怒りによって。

「……んで……」
ありえない。ありえないだろ。どうしてこんなことになった。

「なんで女になってんだ　　ッ！！」

咆哮。噴火の如き大声音。そのあまりの怒り具合に、電線に座つて窓からこちらの様子を眺めていたクラスたちは、ビビりすぎて飛び立つこともできずに風を掴むこともできない翼を無意味に羽ばたかせながら墜落していった。

地面に座り込んで深く肩を落としてしまう。いわゆるネットで頻繁に用いられるorz状態。

だが、少し待て。まだそうと決まったわけじゃない。女に見せかけて、実は男の娘だった、なんていうオチなのかもしれない。気を取り直し、再び立ち上がる。そして一気に服を脱いだ。

「……生えてない（二つの意味で）」

ショックがでかすぎる。こんなに衝撃を与えられたのは、イヴァンが死んだとき以来かもしれない。

「ふふふ……」

人間ってショックが大きすぎると笑いが出てくるもんなんだなあ。しみじみと思った。そんなこと、体験し実感したくなんてなかったが。

「おいどんの鍛え上げた男魂だんこんがなくなつたなんて……。毎日毎日ダンベルで鍛えてたのに……」

ときには唐辛子やカラシで腫れ上がらせて一気に巨大化させようなんて考えたこともあった。毎日トレーニングにトレーニングを重ねて、まるで彫刻のように美しい一品を作り上げた。それなのに……それなのにこんなやつてないだろ。

すまない、息子よ。

きみの死は忘れないぞ……。

心の中で今は亡き息子に最敬礼を送った。

第二話 〈万能公〉

気を取り直して、部屋を漁ることにした。この身体の少女のことを知るために。

きっと俺は。

あるとき、死んだのだろう。

そしてこの少女に憑依したに違いない。

創作でよくあるように、少女の魂は故という魂に押し潰され、霧散してしまったのだろう。そうでなければ、故がこの身体の支配権を握っているはずがない。

それなら、これから自分はこの少女として生きていかなければならない。それには、少女のことを知る必要がある。

「イヴァン……」

師であり、父であり、兄であり、相棒であり、……そして親友であつた青年のことを想う。

なあ、イヴァン。

『よかった……無事だったか』

俺は、身体を失って。別の人間になっちゃったけど。

『ごほう。……故、逃げる』

お前の遺言は、忘れない。

『生きてくれ……』

そう、自分の命を最優先に。何よりもそれを第一に。それがイヴァンの残した言葉だから。

「……っと、搜索搜索」

思考が脱線してしまった。

搜索を再開する。

……そして、しばらく漁り続けて。大体のところは判明した。

この少女は？　水月故、一四歳。同じ名前だ。生年月日も同

じみたい。

経歴。現在は市立三笠中学の三年五組に所属。

今までに何があったのかとかはわからなかったけれど、まあ良いだろう。名前とかが判明しただけでも良しとしよう。記憶喪失とか言い訳すればいいし。

「明日から学校か……」

搜索したときについてに発見した制服を手にとって、故はそう呟いた。

まさか女物を着ることになるなんて……想像だにしていなかった。おいをかいでみる。……うん、芳^{かぐわ}しい。女の子のおいだ。

「はあ……。勃^たたないなんて、違和感があるな」

女の子のおいを胸一杯に吸い込んだのに、なんの反応も起きない。由々（ゆゆ）しき事態だ。

女体化してしまったのだから仕方ない。だけど、納得はできない。……落ち着け。クールになるんだ」

気を取り直そう。そのためには、女体化してよかったと思えるようなことをしないと。

とりあえず胸を揉んでみる。もちろん服の中に手を入れて、直接。……柔^ならかい。最高だ。

右手で胸を、左手で尻や雄々しかった男魂跡地を弄びながら、新しき自分の身体を目一杯楽しんだ。

そんなことをしていると、もう外は暗くなっていた。街灯が点滅し、世界を照らそうと努めている。もうずっと何も食べていないため、腹も空いている。

「何か食べないとな」

階段を下りると、故は冷蔵庫を漁った。だが中身はほぼ空であり、あるのは卵が一個とマヨネーズ、そして黄色っぽく変色し端の方が黒くなっている肉しかない。

こんなものは喰えない。いや、食べられることは出来るが、しかし腹を壊してしまうことは請け合いだ。

思わず頭を抱えなくなつたが、しかし空腹を意識したらそのダメージが刻一刻とボディーブローのようにひどくなつて行つてゐるため、そんなことをする余裕もなく機敏な動作で財布を掴むと早足で買い物に出かけた。

だが、故は失念していた。まだ周囲の地理を把握していないと言うことに。

そのためどこに店があるのかわからず、まるで迷子の幼子のようにきよるきよると周囲を見渡しながら歩き回ることになった。

一〇分ほど歩いたが、まったく見つからない。それどころか、自分がどうやってきたのかすらわからなくなりかけている。なんとなくどこかで見たことのある地理であるが、霞がかつたかのようによくわからない。それが余計に故を混乱させる。

本当にどうしようかと思ひながら歩いていると、前方から人影が近づいてきているのを見つけた。

「恥ずかしいけど、訊ねてみるか」

いい年した男（今は女だけど）が迷子になつてゐるなんて知られるのは恥ずかしい。だがそうも言つてられない。

人影が近づいてくる。そろそろ声が届く距離だろう。そこで声をかけようとした瞬間、

「久しぶりだな、故」

人影は立ち止まって、先にそう声を発した。

自分のことを知つてゐるこの人は誰なのか。故は人影を注視するが、その顔は深く被られたフードに隠されてゐてわからない。

首を傾げる。瞬間、風が吹いた。スカートをはいた脚はズボンとは違つて風の影響をモロに受け、水を掛けたかのようにスースーする。

とそこで、そう言えば自分は今女になっているんだと言うことに気づいた。

ならばこの人は、自分の身体の本当の持ち主である少女・故の知り合いなのだろう。

「すみません。誰かとお間違いになってはいないでしょうか」

本当にその仮定が正しいというのなら、こうするのが正しいだろう。もしも知ったかぶりをしたら、懐疑心を抱かせる結果になってしまうのは一目瞭然だから。

人影は唇を吊り上げる。

「いいや。お前で間違いないよ、水月故。カプールを墜とした際、その跡地で酒を交わしあつたろう？」

カプールという言葉には、心当たりがあつた。かつて故が所属していた組織、『星の叡智派教団』がアフガニスタン国内で起こった大規模内乱に参加し、首都カプールを拠点としていた組織『WIGC教団』を壊滅させた。その際に仲間たちと勝利を祝って酒を飲み交わしたのだ。

それならば、かつての仲間　そして刺客なのだろうか。

「どうして俺が故だとわかった。声も身体も、こんなにも変貌しているというのに」

すぐさま攻撃態勢に移れるよう、膝を軽く曲げながら訊ねた。今ここで殺すことは容易いだろう。だが他にも自分のことについて知っているものがあるのか、そして自分がバレた原因を知るために、まだ殺すことは出来ない。今はまだ。

「間違えるはずないだろう。私が誰だか忘れたのかね」

人影はフードを取り払った。パサリ、という軽い乾いた音と共に、脆弱な月星の燐光やかすれかけた街灯の光に、露わになった顔が照らし出される。

それは、男だった。名を、レオ　レオ・ヴィンドと言う。星の叡智派教団員ではなかったが、世界中を渡り歩いていた彼とは内乱中何度も遭遇し、酒を飲み交わした仲だ。

「《万能公》」

故はレオの二つ名を口にした。レオはありとあらゆる知識を持っており、また未知を求めて世界を旅して回っていたのだ。

レオは微かに唇を吊り上げて笑みを形作った。切れ長の瞳は細まり、端正な顔は妖艶な雰囲気醸し出している。染色では到底届かぬ美しい金髪は、まるで月の光を集めたかのように輝いている。

「そう。私に知り得ぬことはなし」

レオは両手を広げ、神に宣言するかのよう到大仰に言った。

「それで、まさかこんなところにいるとはな。かつてお前が語った地、お前の生まれ故郷に。もう死んだと聞いていたが」

「生まれ故郷？」

レオの言葉に、故は首を傾げた。

周囲を見る。先までどこか微かに既視感を抱かせていたそれ。それが急に霧が晴れるかの如く鮮明になり、古い記憶を蘇らせた。

「そうか。どこか見たことのあるところだったと思ったら、そうだったのか」

生まれ故郷。埼玉県三笠市。そう、ここは三笠市だ。まだ完全には思い出せていないが、ここはかつて自分の家のあった場所、その近辺だ。

ようやく納得がいったとばかりに故がひとつ頷くと、突然レオはこんな意味不明なことを言った。

「だが どうしてお前はまだここにいるんだ。お前はここにいないべき存在ではない」

断言。存在否定。故は一瞬心臓がどくと強く鼓動したのを感じた。

たしかに自分は一度死んだ身だ。なぜかこうして憑依してはいるが、本当なら地獄で赫炎に焼かれているはずなのだから。

「そついう意味ではない」

まるで故の考えていたことが聞こえたかのように、絶妙なタイミングでレオは否定した。

ならば、どういう意味なんだ。

続くであろう言葉を待つ。呼吸は止まり、酸素をどうにか脳へ送ろうと心臓が激しく鼓動する。

だが。

待ち望んだ言葉は、期待を裏切るものだった。

「努々（ゆめゆめ）忘れるな」

風が強く吹いた。アスファルト上に微かに散乱していた砂を孕んで。

瞼が反射的に閉じられる。脅威から逃れようと右腕で顔を覆う。

数秒して風が止むと、故はレオを見た。だがそこには既に誰もいない。虚空だけしか残されていなかった。

「……、」

レオが打ち込んだ不可解な言葉。

それは故の心に、ちくりとした痛みを残した。

第三話 侍繕円

翌日。故は職員室の前で立っていた。俯きながら。

股がスースーする……。

スカートは太腿ふとももに当たってなんか変な感じがするし、履いている黒ソックスは不思議な感じがする。女装してる気分になる。今は女だけ。

頭を抱えなくなる。自分は女の子は好きだけど、女装趣味はない！

「あー、……どうしたんだ？」

いつの間にか担任が来ていたようだ。

どうやら実際に頭を抱え、ぶんぶん頭を振っていたらしい。教師は、『こいつ大丈夫か？ 主に頭が』的な顔で故を見つめている。

「え、ええ」

「そうか。じゃあ話を戻すけど、俺がきみの担任となる滝川未来たきがわ みらいだ。みっちゃんでもみーくんでも、なんでもいいぞ」

今度は故が『コイツ大丈夫か？ 主に頭が』と考えながら見つめてしまった。

きもい。きもすぎる。明らかに変態だ。

冷たい目で見つめていると、なぜかは知らないが、ビクンビクンッ！ と滝川は震えだした。

「うわぁ……」

顔が逝っちゃってる。露出狂みたいな顔してる。

実際にいたなあ、組織が壊滅して教団に救出される前は。

露出狂が、敵にも味方にも。

明らかに警察に捕まるだろ、この顔は。主に、猥褻物陳列罪とかで。

こちらの冷たい視線を十分に堪能した滝川は、垂れてる涎をスーツの裾で拭くと、誤魔化すようにでかい声で言い放つ。

「ご、ごほんツ！ あー、実は持病の顔面神経痛が急に発病したみたいだ。気にするな。……じゃあ、教室に行くぞ！」

……絶対に嘘だろ？

きちんと空気の読める故は、ツツコむことをせず。滝川の後ろを、しずしずとついていった。

……ただ、相手をしったり関わったりしたくないという気持ちで過半数を超えていたのが、ツツコまなかった最大の理由だが。

一応朝に学校に連絡をして、自分が記憶喪失になったということ伝えていた。だから職員室では、ある程度整理がついていたのか、教師たちの混乱は目に見えるところではなかった。

だけど、やはり。生徒たちには伝わっていなかったようだ。まあ、朝に、しかも職員室にのみにしか連絡していなかったのだから、当たり前だが。

「大丈夫だった？ 心配してたんだ、あたし」

「オレもオレも！」

「俺のこと、覚えてる？ 故ちゃんの恋人だった浩二だよ」

「いや、デマるなよ」

滅茶苦茶クラスメートが集まっている。転校生にこの年頃ならよくやるような感じ。このままじゃ貴重な一〇分休みがこれだけで終結してしまう。

てか、その『オレ』とか言った奴。お前、イントネーションがおかしいぞ？ 普通、『レ』に向かって上昇調になるだろ。なんで『オ』を強く言って、『レ』がいきなりものすごく下がってるんだ？ 「ふっ、きみたち。ぼくのハニーに群がらないでほしいな」

なぜかは知らないが、薔薇を咥くわえてる優男やうめいが湧わいて出てきた。自分が格好いいと勘違いしているタイプだ、こういうのは。

「ふっ……」とか言いながら髪を掻き上げてポーズを取っている。……だけど、気づいてるか？ 咥くわえてる薔薇の棘が刺さってるみ

たいで、唇から流血してるぞ？

「なんだよ、怜治^{れいじ}。ハニーってなんだよ。お前には彼女が三四人もいるじゃねえか」

「ふふふつ。モテない男の僻^{ひが}みかい？ 情けないな」

無意味にくるりとターンする怜治。

そして再びこちらを向くと、頬に指を這わせ、

「たとえ、きみの記憶が失われても。身体に深く刻まれた、ぼくとの思い出は……覚えてるはずさ」

怜治は顔を近づけてくる。

そして、吐息が触れるほどの距離で、こう言った。

「ぼくと過ごしたあの日の夜の味は 忘れられないだろ？」

「死ね」

殴った。思いつきり。顔面に右拳をめり込ませた。

「ぶひゃっ！」と奇怪な声を発しながら、まるで漫画みたいに空中で二回三回と回転し、怜治は頭から落下していく。そして机や椅子を吹き飛ばしながら壁に衝突した。

「ふん。母手^{もて}怜治が。いい気味だ」

どうやら怜治の名字は母手というらしい。周囲を取り巻いている男のひとりが、鼻を鳴らしながらそう言った。

ざわざわと騒がしく休み時間は過ぎていく。本当は、男なんかどうでもよくて。女の子といちゃいちゃしたいんだが。

視界の、隅で。

黒の長い髪をした、少女が。

訝^{いぶか}しげに探るような視線を、俺に向けてきていた。

それが、とても。とても気になった。

ようやく昼休みになった。さあ、女の子と食事しよう！ わくわくが止まらないぜ。

……そう、思ってたのだけれど。弁当（コンビニの。四八〇円税込み）を取り出そうと鞆に手突っ込んでいたら、横から声をかけられた。

「水月さん。ちょっとお時間を取って頂いても構わないかしら？」

視線を軽く動かして見る。どうやら一〇分休みのときにこちらに訝しげな視線を送ってきていた少女だ。

「お嬢さんは？」

「お嬢っ！？ ……ま、まあいいわ。わたしは侍^{しぜんまどか}繕^{しぜん}円。クラス委員長を務めているわ」

円は故の言葉に過剰反応した。そんなにお嬢っという呼ばれ方が恥ずかしかったのだろうか。

「そう」

「それで、お時間を頂いても？」

「……」

さて、どうするか。

今までの経験からくる勘が、円は決して常人ではないと囁^{ささや}きかけている。

いや、円自身はただの女の子と変わらないだろう。肉体的には。歩き方ひとつとっても、決して重心がブレないということはない。そこから判断できる。

俺や刺客と同じか？

身近にそんな存在がいるのは身に危険が及^あぶ。それにもし円の背後にまだ能力者がいるのならば、その存在を露^{あら}わにさせなくてはならない。

「……わかった」

「ありがとう。それでは、ついてきて頂けますか？」

「ああ」

円は軽く一礼すると、歩き去っていった。それを追って、外へ向

かう。

この三笠中学は、東京ではなく埼玉にあるためか、かなり敷地が広い。グラウンドに加え、屋外プール、テニスコート、相撲場、弓道場などの施設や設備が屋外に設置されている。それだけでなく、立ち入り禁止となっているが、五〇メートル四方ほどの広さの林もある。

故は円についていき、林の中に足を踏み入れた。

今日は六月三〇日。今年は異常気象のため、例年の真夏以上にもう既に暑く、気が早い蝉たちが耳障りなほど煩く泣きわめいている。ぐにやりと軟らかい土。暑さに死した虫たちが還った、父なる大地。それは異常なほど柔らかく。靴が底なし沼にでもはまったのではないかと錯覚してしまうほど、軽々とめり込んでしまう。

足が蝕まれていく。軟錠の如く縋り付いて離れない土は、確実に疲労を蓄積させていく。まったく鍛えられていない脆弱な少女の肉体では、到底拒絶などできようはずもない。

青々と茂った木々の葉。満天の天蓋となっているそれらの隙間から零れ落ちてくる日差しの眩しさに、思わず手をかざして目を細めてしまう。

くちやり。くちやり。くちやり。

獣が未だ死にたてで瑞々しい遺骸を咀嚼しているかのような水っぱい音が断続的に響き渡る。故と、円の足音。

雨後のようにしっかりと足跡が残されていく。だがそれは一瞬にして周囲の土と癒着し、形状合金の特性を持っているかのように瞬く間に元の姿を取り戻していく。

くちやり。

くちやり。

くちやり。

足音は、続いていく。

もう、結構な距離を歩いたのに、まだ。

くちやり。

くちやり。

くちやり。

……くちやり。

ようやく、止まった。

この林の、真ん中辺で。

円はこちらに振り向いた。その表情は、教室での眼鏡っ娘委員長といった感じの真面目系では決してない。猫を被っていたのか、そこら辺にたむろしているギャル……いや、一昔前のヤンキー漫画に出てくるようなレディースに所属している女の子みたいに険しい顔だ。

「あなたに聞きたいことがあるわ」

すっと目を細めた。その射貫くような視線は、決して虚偽は許さないと、無言に語っている。

即座に反応できるよう、軽く重心を下に下げる。浅く膝を曲げて。たしかに女の子は好きだ。大好きだ。だけど、自分の命の方が大切だ。イヴァンの最後の頼みを、破ることなどできない。

「……」

無言で続きを促した。

円はより一層目を細め、こう言った。

「あなたは 《クリエーター世界師》ね？」

《世界師》？

それは、なんだ？

今まで長年裏に深く関わってきたが、そんな単語は聞いたこともない。

故が憑依したのは、死んでから一週間後だった。そのため、憑依までに長い年月が経っていて、その間に新たに生まれた言葉というわけでも決していない。

「それは、なんだ？」

決して敵意を見せず、素直に訊ねた。今は円から少しでも情報を得るべきだから。

円はその言葉を聞き、苛立ちを隠さなかった。その怒りを表すかのように、円の周囲が微かに揺らいでいく。

「最後にあなたの見舞いに行ったときは、あなたの両手足は切断されたままだったわ。それなのに傷跡も残らないほど完治しているなんて……。それにあなたから感じる波動。あなたが《世界師》である証拠じゃない！」

「俺は手術の後に眠り続けてたって、担当医が言ってた。だから、手術で治ったんじゃないのか？ 記憶がなくなってるから、正確なことはわからないけど」

「それでも、あなたが《世界師》でないという理由にはならないわ。答えなさい！ あなたがその力をどういう風に使うのか」

「それ以前に《世界師》ってなんだよ」

本当に、訳がわからない。

円の周囲の揺らぎ それは《能力》が微かに漏れ出している証拠だろう。

きっと《世界師》というのも《能力者》の一部であろうことは推測できる。だけど正確性に乏しい。詳細も、足りていない。

今は情報が欲しい。身の安全を確保するために。

「もついいわ。埒が明かない。こうなったら、力尽くで聞いてあげる」

その瞬間、世界が変わった。

端から世界が浸食されていく。

まったく別の、新たな世界。

円に奔って形作られていく。

思わず呆然としてしまった。こんな能力、見たことがない。世界を塗り替えるなんて。

永遠と続いている広大な大地。美しい花が咲き誇っている。そして、多くの木々。

汚染物質が蔓延しているこの地球上では、決してみられないほど美しい青空。

そして、元いた空間とは完全に断絶されている。

「こ、こは……？」

周囲を呆然と見つめながら、呟いた。

だが、決して。円への注意を払い続けることは忘れない。

円は右手を腰につけ、勝ち誇ったような笑みで、こう言った。

「これがわたしの“世界”

残されし最後の樂園^{ラストエデン}」

花が、うねうねと蠢く。巨大化していく。それこそ、樹木並みに。どんどんと伸び、生きているかのように。

それらは子犬のように、円にじゃれついている。身体に巻き付き、顔と思しき花弁部分をこすりつけている。

「まだ《世界師^{クリエーター}》に成り立てのあなたでは、展開された“世界”に自分の“世界”を上書きすることはできないでしょう？ ……あなたの負けね」

円は左手の人差し指を伸ばし、故に向ける。

そして、こう宣言した。

「行きなさい」

まるで、指揮者のように。円は差し出された左手を指揮棒代わりに閃した。

すると、地面から無数に生えている妖花が襲いかかってきた。

「ちっ」

死ぬ前なら、様々な武器があった。だが一介の少女でしかないこの身体の持ち主は、そんなものを持ってはいようはずがない。

今あるのは、カッターのみ。とてもではないがあんなボディービルダーの腕のような太さの花たちを相手にすることはできない。

……そう、普通なら。

生憎、俺は普通じゃない。

ポケットからカッターを取り出すと、一息に刃を出す。

そして、魔眼を解放した。

巨大な黒いヒトガタが見える。魔女が着ているような黒いフードを被^{かぶ}った、ヒトガタが。

すべてのモノの背後に。

その漆黒の指先からは、無数の糸が。眼前のモノに繋がっている。

「っ！……瞳の色が、変わった？」

円が驚愕した。

それも当然だ。この魔眼 《糸認^{しにん}の魔眼》を発動させると、虹

彩^{アメジスト}が紫水晶の如き色に発光するのだから。

くるりと旋回させる。手の平の上で、カッターを。

そして逆手に構え、鼻の高さで手を伸ばし、

「その繰^くり糸 断たせてもらっ」

神速で駆けた。

迫り来る花々。一個の生命体のように、大蛇のように。機敏な動きで。

妖花を攻撃する必要はない。切りつけるのは 糸！

全体重を乗せた花のプレス。それを、地を蹴って躲す。

木の幹に着地すると、身体が落下を始める前に幹を蹴りつけて再び飛翔した。

斬。

鋭く、切りつける。花についている、ひとつの糸を。

その瞬間、花は身体に力が入らなくなったかのように崩れ落ちた。ビクンビクンと痙攣している。どうにかして立ち上がるうとするが、しかしそれは叶わない。

「くすくす……所詮は糸に縛られている、壊れた人形」

再び幹を蹴りつけ、宙を駆け回る。

それは、三次元的な駆動。

閃光の如く空を駆けるその姿は、まるで蜘蛛。中空に巣を張った捕食者。

やはり脆弱な少女の身体では、以前のような速度を出すことが叶わない。半分以下だというのに、全身の筋肉が断裂しかけている。そこかしこから悲鳴が響き渡っている。

たしかに、鍛えられているようだ。外見からは想像できないくらいに。一般の少女よりもずっと強い筋肉と身体能力を保持している。されど、少女ということに変わりはない。鍛えに鍛えられた生前の自分と比べれば、脆弱の一言に尽きる。

だけど、それでも。花々は、この身を追うことができないでいる。追尾もできない奴らは、いくら身体が強靱であっても、敵ではない。

駆け回りながら、迅雷の如く糸を切断していく。

数十秒後には、すべての花たちは地面に倒れ伏していた。

「なんなの？ …… なんなのよあなたはッ！ どうして…… どうして動かないの？！」

必死に花々を起動させようと念を送り込んでいる。

だが、花たちは。懸命に藻掻もがいているが、神経が断線しているかのように身体を動かせていない。

やはり円は素人のようだ。いくら“世界”を作る能力を保持していようと、戦闘をする上で最低限の事柄すら満足にこなせていない敵に注意を払うということすら。

未だに円は妖花たちを立ち上がらせようと鞭打つ言葉を放ち続けている。こちらに注意をまったく払わずに。

木々を蹴りつけて上空から円の背後に回る。

そして、円の両手両足に繋がっている四本の糸を両断した。

「チェックメイトだ」

円は崩れ落ちた。気絶したかのように、四肢に力を込めてもまったく動かせず。

一抹の恐怖を宿した円の瞳が、故を捉とらえる。

「どうして……？ 身体が、動かない……。虚空をカッターで薙いだけなのに……」

円の疑問ももつともだ。

この魔眼は糸と傀儡師くわいしを視認する。

傀儡師は物、生物問わず、すべてのものの背後についている。動こうとすれば、背後の傀儡師が指先から伸びている糸を繰り、そして身体が動く。

言わば傀儡師は行動を指示する脳であり、操り糸は身体を動かす神経なのだ。

そこで、糸が切れてしまったらどうなるだろう？

答えは簡単。その糸が繋がっていた、司られている部位は、動かなくなる。どんなに強靱な意思を以てしても、決して。

もちろん、切断された糸は、傀儡師が修復する。だがそれにもあ

る程度の時間がかかってしまう。

「……さて、どういうことだろうな？」

わざわざ答えを教えてやることはない。いくら女の子が好きな故であっても、そんな短絡的な行動が自分の身にどれだけの危険を及ぼすかは理解している。

故に、自分の命綱である情報を漏らすことなんてありえない。

「それじゃあ質問に答えてもらおうか」

首筋にカッターを当て、訊ねた。

「つく……、やっぱりあなたは悪ね。他人の命を簡単に奪えてしまう」

震えながらも、気丈に睨み付けてくる。

円は可愛い。たしかに可愛い。つるぺたであり、眼鏡っ娘属性。黒髪ロングで、しかも委員長長属性までも保持している。

そんな娘が涙目で睨み付けてくるのだ。心の奥底からまるで津波のように熱いパトスが溢れてくる。

だけど。

戦場では、何よりも情報が重要だ。

俺の欲望や感情を優先させることなど、してはいけない。

「早く言え」

濃密な殺気を一点に凝縮し、貫いた。

「ひっ……」

身体を痙攣させている。こんな殺気を実際に受けたことなど一度もなかったのだろう。

ここで止めてはいけない。さらに心を砕き、完全に屈服させなければ。

より殺気を強め、解き放った。

「あ……っあ……」

強すぎる殺気に呼吸困難を起こしている。鯉のようにぱくぱくと口を開閉させているが、しかし完全に固まった筋肉は錆び付いた絡繰り人形のように動かず、空気をまったく取り込めていない。

膀胱はうじようの筋肉も役割を完全に放棄したようだ。膀胱は緩み、秘部から汚水を垂れ流している。

美少女のそんな嬉し恥ずかしな姿に内心で歓喜の涙を流しながらも、しかし決して表には出さない。強靱な精神力で、無表情の仮面ベルソナをはめ続ける。

やがて精神が限界を迎えたのか。円はふっと意識を失った。

それと同時に、現実を浸食して展開されていたこの“世界”、残されし最後の楽園ラストエデンは霞のように解けていき、元の世界が戻った。

「これでよし。あとは、意識が戻るまで待つてるか」

円を姫抱きに、歩いて行く。そして木の幹に横たわらせた。

「まだまだ起きそうにないなあ……」

何をしているか。経験的に、かなりの時間を気絶し続けるだろう。そのとき、ふと風が吹いた。円の絹のように滑らかな髪が、鼻をくすぐった。

「いいにおいだ……」

思わず鼻の穴が膨らむ。血圧が急上昇している。

気絶してるんだから、今のうちにおいしく頂いてしまおう。授業なんかサボってしまっても構わない。美少女との一時の方が、授業なんかよりも何兆倍も重要であり有益だ。

全裸なんてナンセンス。服を脱がせても靴下だけは脱がせるな！

真っ裸なんて猿と同じ。衣服は人類の生み出した最高の宝具だ。

着衣のままだったらなおのことよし。

とりあえず唇を奪う。舌を伸ばし、歯をこじ開け、口腔内を蹂躪みじみじする。

一〇分近く円の唇を堪能たんのうすると、口を離れた。ふたりの間を細い銀糸が伸びている。

もちろん、これだけで終わるはずがない。胸や太腿、尻、身体中を揉みしだき、なで回す。そして胸にしゃぶりつき、秘部に吸い付き舐め回し、身体中を味わっていった。

第四話 〈世界師〉

一時間と少しが経った。既に六時間目の鐘が鳴って十数分が経過している。

少女の身体を心ゆくまで堪能していると、ようやく円が目を覚ました。

「う……あんっ……」

艶めかしい声を漏らし、薄く目を開ける。

寝起きで焦点の合っていない視線がきよろきよろと動く。そしてこちらを捉えると、はっと飛び起きた。

「それじゃあ、話してもらおうか」

「ひ、あ……」

完全に怯えられているようだ。ぶるぶると震えている。

安心させるように、柔らかく笑む。いつもの欲望丸出しな感じは決して出さず、努めて好青年風に。

「大丈夫。何もしないから」

「う、あ……」

「さつきは攻撃してきたから、反抗したんだよ。あのままだったらこっちが死んでたからね。……大丈夫。まどかんのことは絶対に傷つけないから。ね？」

頭を撫でる。母親が赤子にするかのように、優しく。

それでようやく落ち着きを取り戻したのか。過呼吸気味だった呼吸は、だんだんと穏やかになっていった。

円の顔が赤く染まっていく。それは恐怖から解放されたためか、はたまた今の自分の状態が恥ずかしいのか。

「ご、ごめんなさい。大丈夫ですっ」

円は俯いて、すぐさま少しだけ離れた。

そして深呼吸をすると、おどおどと視線を向けてきた。好きな人になかなか視線を向けられない思春期の少女のように。

向けられているだけで死してしまうほどに強すぎる殺気を受けて崩壊寸前だった円は、その相手からまったく逆の優しい感情や態度を向けられ、故を意識しだしたようだ。それは吊り橋効果のように、自分の心が極限状態に置かれている中で優しくされたことで、恋愛感情かただの好意かはわからないが、そういうのが形成されたのだろう。

故には学はまったくないが極限状態は何度も経験があったため、そういうことは感覚的に、経験的にわかる。

……そう。その、はずだった。

だが可愛い女の子が目と鼻の先で、しかも自分に対してそんな態度を取っているのだ。頭に血が昇り、冷静さなど遙か彼方へと吹っ飛んでしまった。

「フラグきたコレ！」

「フラグ？」

本当に何を言っているのかわかっていないような円の表情。

それによって冷静さを取り戻した故は、ごほんとひとつ咳をして話を急激に変えた。まるで某レーシング漫画のドリフトのように、鮮やかに。

「《世界師》^{クリエーター}とかについて教えてもらえない？ 初耳だから、まったくわからないんだよね」

「そ、そうですね。わかりました」

戦闘前とは一八〇度違う円の態度。もう故のことを疑ってはいない。それが故が円を殺さなかったためか、好意を抱いたか。理由は定かではないが。

「もともとこの世界には、人にあらざるものが存在していました。それは語り継がれてきた存在 神とか悪魔とか、そんなモノです。それらを一括りに《妖魔》と呼んでいました」

円の説明は続いていく。

《妖魔》は人間の恐怖などの感情がカタチを成したものだ。

それらの感情から生まれたため、生存していくためには人間のそ

ういう感情を得なければならぬ。

そのため、遙か昔は人間たちを襲い、恐れられてきた。

だが人間の科学技術が高度に発達していく内に、《妖魔》などはすべて科学的に説明できないものとし、その存在を否定された。

存在しないというのが人間たちの常識となり、非現実的なことはすべて錯覚や勘違いと考えられるようになってしまった。

そのため人間を恐れさせるという役割を果たせなくなった《妖魔》たちは、世界に追放された。

そんな《妖魔》たちが辿り着いた先。それはこの世界と同じ場所に存在していながらも、しかし決して触れることも見ることも出来ないところ。たしかに同一箇所にありながらも、しかし存在位相が異なっている世界。

それは《劫末の世界》と呼ばれている。

発展など望むべくもなく、ただただ終焉へ向かっていくことしかできなくなった《妖魔》たち。彼らは、しかし、ついに現状の打開を思いついた。

それは 人間との同化。

「《妖魔》は、人間の最も脆弱な部分（心の穴）から忍び寄ってくる」

人間の心には《穴》がある。それは羨望や嫉妬、後悔など、一般に負と捉えられているモノだ。

その中に入り込み同化すれば、その人間の一部としてだが、しかしたしかに心の中に自分の存在を植え付け、生き長らえることができる。

その考えの基、《妖魔》たちは進化を果たした。魂のみの存在へと。

精神は物質世界に縛られない。肉体という殻から解放された存在だから。そのため、この世界と《劫末の世界》の壁を越えていくことができる。

そうして《妖魔》たちはこの世界にやってきた。それが、一年前

のこと。

一年前からよく流れ星が確認されていた。その流れ星は、実は《妖魔》たちの魂だったのだ。一般には知られていない、関係者のみが知っていることだが。

そうしてこの世界にやってきた《妖魔》たちだが、しかし実際にはそのすべてが人間たちと同化できたわけではない。

心の穴とは、言わばコップだ。

穴が深ければ深いほど　つまり負の感情が大きければ大きいほど、《妖魔》たちを収められる。

心の穴がコップで、《妖魔》たちの魂が水。

水の量よりコップの容量の方が大きければ、問題なく水をすべて入れることができる。それが、《妖魔》たちを吸収できた人間

その逆で、コップの容量の方が少なかった場合、水は溢れてしまう。その場合、《妖魔》たちの魂を吸収しきれなく、身体の方が耐えきれなくなつて死に至つてしまう。

現代社会において、心に穴を持っていない人間なんて存在していない。穴の深さは千差万別。しかしその中でも《妖魔》たちの魂を満たせるだけのモノはなかなか存在しない。

それに加え、《妖魔》たちの力の度合いによつても、必要な穴の深さは変化していく。

力が弱ければ穴は深くなくても良い。だが力が強ければ強いほど、穴は深くなくてはいけない。

そのため、ほとんどの《妖魔》たちは同化を果たせずに自滅してしまつた。

「……」

円の話は、まったく聞いたことなどないものだった。だいたい、流れ星がそんな大量発生したなど記憶にない。

自分がたまたま知らなかったというわけではないだろう。だが、だからといって、ここが自分の知らない異世界というわけでは決してないだろう。歴史は同じだったはずだし（と言つても正確性に乏

しいが。残念なことに学が浅いから）、自分のいた地球と国や市町村の一致点と同じものばかりだ。世界地図も同じだったし。

「《妖魔》たちを吸収できた人間たちは、その結果、《能力^{ちから}》を得ました。それは世界を騙し、自分の心象世界をこの世界に浸食させるモノです。そんな能力を得た人間たちは、《世界師^{クリエーター}》と呼ばれています」

故の解に至らない疑問をよそに、円の説明は続いていった。

世界は自分の意思をよそに世界を改変されるのを嫌う。

だから普通ならそんな能力を行使するのは不可能だ。だが《これは自然なモノだ》と世界を騙すことで、自分の内包世界を展開しているのだ。

《世界師^{クリエーター}》たちは自分の世界を展開することにより、能力を一〇パーセント行使することができる。

だが別にわざわざ展開しなくとも、本来の能力から派生した劣化能力はそのまま行使することができる。円で言えば、本来の能力は《無数の妖花を操る》というもので、劣化能力は《花を巨大化させる》、《花を操る》などだ。

心象世界が現世に現出した中で、他の《世界師^{クリエーター}》が自分の世界を展開することは通常できない。たとえ同じ力量であっても。それ以下の力しかないのなら、何を言わずもがな。

世界を上書きするには、それ以上の力を持っていなければできない。

「能力は魂を吸収した瞬間に理解できます。それは蜘蛛が生まれた瞬間から巣の張り方を知っているように、自然なことです。

……と言うことです」

円の説明が終了した。

《世界師^{クリエーター}》、か。

円の力量がどれほどのものかは、わからないけど。

限定的に“世界”を作り出す輩とは、なるべく敵対したくないな。

それには《世界師》^{クリエーター}たちが組織を作っているかを知らなければならぬ。人間であれば、いくら力を持つていようと、同じようなものたちの集団に身を沈ませるのが一般的だ。

「《世界師》^{クリエーター}たちって、なんらかの組織に入っていない？」

「そう、ですね……。わたしのお父さんが作って、多くの《世界師》^{クリエーター}が入っている組織があります。もちろんわたしも入っています」
やはりあったか。

その組織が大きいものだったら、自分も入った方がよいな。他の《世界師》^{クリエーター}たちからの脅威が分散され、危険が少なくなる。

「それについてはお父さんの方がずっと詳しいので、お父さんに聞いてみた方がよいと思います」

「そうか。いつだったら会えるかな？」

円は顎に指を添えて、考え込む。

「そうですね……。今日の夜だったら大丈夫だと思います」

「じゃあ夜にお邪魔させてもらっても良いかな？」

「はい」

第五話　「ゲヒルン」

授業は滞りなくすべて終了した。

生徒たちはみな長時間の責め苦に耐えきりガチガチに凝り固まってしまった筋肉を解すため、伸びをしている。

やがて回復すると、生徒たちは各々の小集団を作りだし、ホームルームまでの僅かな時間を消費しようとする。故の許には円、そして怜治や彼の友人が集まってきた。

「やあハニー。どうだい、これからデートでも」

気障つたらしく怜治は、ふあさ……！と前髪を撫で上げる。その口には、相変わらず一輪の薔薇が。いったいどれだけの薔薇を持ち歩いているのだらう。永遠の謎だ。

ドゴウー！　という爆碎音。格好つけた怜治の頭が急に横に吹っ飛ばされた。

怜治の横には、凄まじい威力のパンチを繰り出した後のひとりの男が、ふう……、と細い息を吐き出しながら佇んでいる。

「くっ……ひどいじゃないか、星雲^{せいうん}。ぼくになんの恨みがあるんだい？」

殴られた左頬をさすりながら、しかし薔薇は決して外さず。怜治は涙目で、星雲と呼ばれた少年を睨み付けた。

星雲は、やれやれ……、と肩をすくめる。

「おいおい怜治。お前、先日までは水月のことを無視して関わらないようにしてたくせに、ずいぶん都合が良いな」

「う、それは……」

怜治は汗をだらだらと流しながら固まった。まるでサウナに入っているかのようなものすごい排出量。見ている方が心配になってくる。

それにしても、関わらないようにしていたって、どういうことだらうか。

今日の朝に教室に入ってきたときは、みんなが心配そうに取り囲んできた。決して無視されているとは思えないのだけれど。

故が首を傾げると、円が口を開いて説明を始める。

「故は、その……毎日両親から暴力を受けていたという噂がありました。実際に毎日傷だらけで学校に登校されていましたので、みんな関わらないようにしていたんです。ですけど大怪我を負って入院されることになられて、ようやく退院されたと思ったら、瞳と髪の色が変わって、しかも記憶までなくされて……。それでみなさん、ようやく関わろうとされたのではないのでしょうか。故が以前の故ではなく、まったく新しい別人の故になったから」

そう、か。

たしかに俺は別人だ。

たとえ故であろうとも、この身体の持ち主であつた故ではなく。一度死に、この身体に憑依した故だ。

だから以前は無視していたと言われても、なんとも思わない。故は故という少女ではないから。

「別に良い。俺は俺だから」

故はそう言った。本当に、なんでもない風に。

すると冷たく凍り付いていた空気が、緩やかに解凍されていた。

喫茶店『レッドローズ』。

故たちは放課後、遊びに出かけていた。メンバーは故、円、怜治、星雲。

ゲーセンに行き、買い物をし。そして疲れた身体を休めるために、ここに来た。

ここはこの埼玉県三笠市で最も有名な店だ。テレビの某番組でも放送されたほど。

故たちはもう太陽が地に墜ち空が橙に残照しているほどの時間帯だというのに、三〇分も待たされてようやく席に座れた。

「混みすぎだろ」

ぼつり、と故は呟いた。

わざわざ待つてまで食事をするというのが理解できない。食事は栄養を摂取するための行為であり、時間をかけるほどのものではない。だいたい、時間なんかかけていたら、死を傍らに佇んでいる場所に身を常に置いていた故は、死神に鎌で惨殺されていたことだろう。何度も。それこそ、片手で数えられないほどに。

そんな故に、円は苦笑しながら答える。

「美味しいからでしょう」

「？」

「美味しいから、待たされても食べたい。だから、混んでても良いから待っている」

やはり理解できない。

そう思いながらも談笑していると、粘っこい視線を感じた。

ぞわり、と。舐めつくような。

反射的に振り返る。すると後ろの席に座っているひとりの男が、こちらを……いや正確には怜治を見つめていた。潤んだ、恋する乙女の目で。……右手の人差し指を唇に添えながら。

円たちは誰もそれに気づいていない。

「かわいいい（はあと）」

びつくうん！！ と怜治が震えた。

何かを探すかのように怜治はきよきよ振り向く。そしてようやくその男を見つけた。

男と怜治の視線が交わる。すると男は、ぼつ……、と頬を朱に染め、おもむろに席から立ち上がった。

こつん。こつん。

騒がしい店内の中、すべての音が消失し。その硬質な響きだけが反響していた。

男は故たちの席の横に……より正確には怜治の横で立ち止まった。固まってたらだと、まるで鏡に囲まれた蝦蟇のように汗を流している怜治の頬に、男はゆっくりと指先を触れさせる。

「犯^やらない？」

ぶんぶん！！と、怜治はまるで首が吹き飛ばんじやないかというくらいに振り回して無言で否定する。

すると男は「あら、いやね。そんなに恥ずかしがって……」と言いながら、くねくねと身体をくねらす。故も含め、みんなは動かない。いや、動けない。自分に標的が移ってしまうのを拒絶している。

「大丈夫よ。絶対に気持ちいいから。きっとあなたもハマるわよ？」

女口調で男はそう宣言した。

怜治の顔は真っ青を超越して既に死体のように青白い。

そんな怜治を見て、男はこう言った。

「あら！ そんなに身体を冷やして……早く運動して暖まりましょ」

男は硬直している怜治の腕を掴んで引きずっていった。男子トイレへと。

そんな彼らを、故たちは静かに黙祷して、怜治の冥福を祈っていることしかできなかった。

そして、二時間後。

怜治のことを頭から削除して談笑していると、ふらふらとした足取りで怜治が帰還してきた。ミイラのように身体はカラカラに乾燥

していて、頬はやせこけている。左手は尻、正確には肛門を押さえている。

「お、お帰り……」

しーん、と静まった席で。声を震わせながら、星雲がそう言った。怜治は「どこらせ」と、老人のように言いながら怜治の隣に座り、ずずず……、と紅茶をすすする。

「だ、大丈夫だったか……？」

星雲は未だに震えたまま。

怜治は瞼を瞑ると、ぽつ……、と頬を染め。両手で両頬を押さえ、くねくねと身体をくねらせた。

「ど、どうした……？」

異様な様子の怜治に、星雲はそう訊ねた。

怜治は瞼を閉じたまま、こう答えた。

「硬くて、太かった（はあと）」

ぴしり、と。空気が凍り、亀裂が奔った。

されど怜治は未だに頬を染めたまま。固まっている星雲の手を握りしめ、乙女のように自分の胸の前にまで持って行くと、こう言った。

「あなたも犯^やらない？ 星雲」

今度は星雲が身体を震わせ、蝦蟇のようにだらだらと汗を流す番だった。

怜治はそんな星雲を熱っぽく潤んだ瞳で見つめると、星雲の指を口に含んでちゅぱちゅぱと舐め回す。

「う、う……うわぁ ツ！ た、助けてくれ水月、侍繕！ 俺はまだ死にたくない……！」

まるで本当に幽霊に出会ったかのように。星雲は何もかもを投げ

それによって故の存在に気づいたレンは、オウム返しに言葉を返して円に抱きついたまま故に顔を向け、小首を傾げた。

「美しい……」

そう、美しい。故は女の子が最も輝きを放つのは一〇歳という黄金定理をもっている。それに完全に合致するレンに対してそんな感想を持つことは当然の帰結であった。

「でしょ？ 自慢の子なのよ」

円は愛する妹が褒められたことが嬉しいのか、ない胸を張って言った。

レンは故の言葉に顔を真っ赤にする。まるでリンゴ病なのではないかというほどに。そして円から離れると、あわあわと慌てながらこう言った。

「あ、ありがとうなのです。あたしはレンと言うのですよ」

その可愛さに鼻から愛が吹き出そうになるのを必死に堪えながら、故は努めてイケメン顔を作り出す。身体は斜め四五度に。自分が最も格好良いと考える角度へ。そして、ふっ……、と微かに笑みを浮かべながらこう言った。

「ふっ。ぼくは故。水月故だ。よろしく頼むよ、ぼくの愛しの天使」
マイスイートハニー

故はかつての身体であった頃を思わせる機敏な動きでレンの眼前に出現すると、レンを優しく抱き上げた。

「ふ、ふえ……」

あまりの恥ずかしさに頭に血が昇ってしまったのか。レンは顔を真っ赤にして目を回してしまった。

レンをリビングに連れて行くと、故は円と雑談を交わしていた。数分もするとレンも回復したようで、会話に混ざった。

雑談が一息つくと、レンはもう眠いのか、欠伸をすると、目をこすりながら二階に上がっていった。夕食まで一眠りするらしい。残された故はリビングで円の入れた紅茶をふたりで飲んだ。

「ただいま」

遠くから、男の声が聞こえてきた。

円は椅子から立ち上がると、大声を出す。

「お帰りなさい、お父さん」

「おかえりなさい！」

二〇秒ほどして、ドアが開いた。四〇ほどの男が入ってきた。

微かに白髪が交じっている。しかし年齢による衰えを感じさせないほどの覇気を身に纏っている。

「おや、円。そちらは？」

男の視線が鋭く故を貫く。細められた目は故を捉えて放さない。学校で円がそうだったように、故を警戒しているのだろう。

「わたしの友達。水月故さんです。わかんと思いますが、彼女も《クリエーター世界師》です」

「おお、そうか。この街には私と円以外にあとふたり《クリエーター世界師》がいるのは察知していたんだけどね。それがきみだったのか。……私は侍繕健介。けんすけ円の父で、見ての通り《クリエーター世界師》だ」

円の言葉に、健介はすぐさま警戒を解くと、朗ほがらかな笑みを浮かべて手を差し出した。

左手を差し出し、握手をする。

しかし。

どうして、『見ての通り』と言ったんだ？ 円も似たような感じだったけれど、学校で。

まさか、《クリエーター世界師》は相手が《クリエーター世界師》かわかるのか？ 俺にはわからないけれど。

疑問が浮かぶ。本当に、どうして。

「おや、どうしたのかね？」

健介は故を見て疑問の声を上げた。

考えてもわからない。

俺は、朝に初めて《クリエーター世界師》について知ったのだから。健介。新たな《クリエーター世界師》。円以外からの説明を聞くことで、別の

視点からの知識を得られるだろう。

「どうして『見ての通り』と言ったのです？ 俺はあなたが自分で

《世界師》^{クリエーター}だと名乗るまではわからなかったのですが」

「きみは《世界師》^{クリエーター}だろう？ どうしてわからないんだ？」

健介は驚きの色をありありと浮かべた。

そんなことを言われても、わからないものはわからない。

と言うか、俺は《世界師》^{クリエーター}だったのか？

それにしても、心象世界の展開がどうたらこうたらとかがまったくわからないんだが。

《世界師》^{クリエーター}は、《世界師》^{クリエーター}になった瞬間から自分の能力やその扱い方について理解するんじゃないかなかったのか？

「お父さん。故は、記憶喪失なんです。ですから、自分が《世界師》^{クリエーター}

《だということや、自分の能力についても忘れてしまったのではないだろうか？ それに、だから、《世界師》^{クリエーター}を見ても相手が《世界師》^{クリエーター}だとわからないのでは？」

横からの円の説明。それを聞いて、なるほど、と健介は納得した。うん、とひとつ頷いている。

「そうだったのか。《世界師》^{クリエーター}は《世界師》^{クリエーター}を見て相手がそうだと一目でわかり、それにある程度距離が離れていても能力の発動が察知できるから、その可能性はまったく考慮してなかったよ」

健介は椅子に座ると、言葉を続ける。

「《世界師》^{クリエーター}は、言わば人間ではなく、《世界師》^{クリエーター}という名の新たな種族だ。蜘蛛は他の生物を見て、それが蜘蛛か、はたまた他の種族かを一目で看過できる。それと同様、あらゆる生物は同族かどうかを目で見て区別できるんだ。故ちゃんも理解していると思うけれどね」

そうだろうか？ と、健介は故を見た。

たしかにわかる。人間を見ればそれを人間だと一目でわかるし、犬を見ればそれが人間でないとわかる。たとえそれがどんな種族名かを知らなくとも、それが人間かそうでないかは一目でわかる。

「そうなんですか。《世界師》^{クリエーター}はそんな知覚能力を備えているんですか。初めて知りました」

「それだけでなく、身体能力も格段に上昇しているんだよ。まあ、《妖魔》の魂を吸収したんだから、それも当然だけれどね。より高位の存在を取り込んだんだから、身体がそれに順応するように成長したんだ」

なるほど。たしかに、円との戦闘中、自分の身体能力が高いと思っただ。ずっと病院で寝たきりで筋力が衰えているはずなのに。それにはそんな理由があったのか。

「それに加えて、回復力も同じく強くなってるんだ。たとえナイフで腹を刺されても、一日で治るくらいにね」

恐ろしい。素直にそう思った。

やりようはある。怪我を負っても一瞬で回復しない限りは、いくらでも。頸動脈を切ったり、心臓などの重要な臓器を破壊したり。はたまた頭部を破壊したり。ほかに、考えればいくらでも。

でも、それでも。回復力がそれだけ強いというのなら。たとえ大怪我を負っても、すぐに回復できる。

それは、凄まじいまでの強みだ。

「まあ、一瞬で回復できるわけではないよ。たとえ紙で皮膚を切ってしまったくらいでも、瞬く間に回復できるはずがない。ある程度の時間が必要だ。それに、細胞が死滅してしまっていたら、いくら回復力が強くなっているとはいえず、回復できない」

やはり一瞬では不可能なのか。

健介の言葉を脳に深く刻み込み、なおかつ疑問を解消していく。そんなことをしていると、

「ところで、故ちゃんはどうしてここに？」

「俺は、あなたが《世界師》^{クリエーター}たちの組織を作ったと円から聞いて、それについて聞きに」

「そうか」

健介は紅茶を啜る。そして一息つくと、机の上にカップを置き、

説明を始めた。

「たしかに私は組織を作った。《世界師》^{クリエーター}は強大な力を後天的に得た存在だからこそ、その力に酔ってしまふ。故に《世界師》^{クリエーター}たちはその力で以て思^{もっ}うがままに暴れ回ってしまふんだ。暴力に使ったり、色々ね」

「……」

真剣に話を聞いていると、視界の隅で、円が動いたのが見えた。

どうやら紅茶を新しく入れてきてくれるようだ。三人分のカップを机の上から取ると、台所へと消えていった。

「だけど、そんなことばかりしていると、すぐに世界は壊れてしまふ。そんなこと、私は赦^{ゆる}せない。それでも警察の端くれ。無闇に人の命が消え去ってしまうのは許容できない。だからこそ、私は作った。《世界師》^{クリエーター}たちを一カ所に集め、その力を暴走させないために彼らを統治するための脳としての組織　ゲヒルンを」

「ゲヒルンの設立目的はわかりました。それでは、ゲヒルンはどのくらいの規模なんですか？　それに、《世界師》^{クリエーター}たちへなんらかの誓約を課していたりするんですか？」

「規模はそこまで大きくない。人数にして数百人ぐらいだから。だがそれは、《世界師》^{クリエーター}たちの組織としては最大規模だ。《世界師》^{クリエーター}たちは組織に入らず、独自で行動を取るものが多いからね。他にも組織はいくつかあるが、ほとんどは数人単位の、組織と言うよりはパーティーだな。

ゲヒルンに入っているものたちは、無闇に力を振るわないように定めている。……そんなことは社会では当然のことだけれど。まあ、他の《世界師》^{クリエーター}に襲われたりしたら、能力を行使しても良いけれど、襲われたときは、ゲヒルンの《世界師》^{クリエーター}たちでその《世界師》^{クリエーター}を排除する」

ちょうど健介の説明が終了したところで、円が戻ってきた。

机の上に置かれたカップを手に取り、一口啜る。

「……わかりました。俺もゲヒルンに入ります」

組織が最大規模というのが魅力だ。それに、襲われた際には組織で以て相手に反撃することも。

規律は、別にどうだっていい。そんなこと、組織に入っていようがそうでないが、変わらないことだから。

組織の後ろ盾がつく。それはすなわち、身の危険が減ること。ここは入るのが最良だ。

「そうか。歓迎するよ」

健介は、満面の笑みで答えた。

もう夜も遅いということで、今日は円の家泊まることになった。着替えは円の借りる。

服を脱ぐと、浴室のドアを開いた。

「あ、故。わたし、まだ入っていますよ？」

円は浴槽に身を浸しながらそう言った。

恥ずかしいのか、即座にタオルを引たくって身体を隠している。気にするな。俺も一緒に入る」

もともとそのつもりできたのだ。さあ、すべてを見せておくれ。両手を広げ、ここからは逃がさん！ とばかりにきゅっきゅきゅきゅとディフェンスする。すると諦めたのか、再びゆっくりと身体を湯に沈め始めた。

それにうむと深く頷く。そして、髪と身体を洗う。そして、浴槽に浸かるうとした。

だが、バスタブはふたりも入れるほどの大きさをしていない。

「ちよつと立ち上がって。円」

「？ わかった」

頭上に疑問符を浮かべながらも、円は言われた通りに立ち上がる。故は円が今まで座っていた場所に座ると、足を伸ばす。そして両手を差し出し、

「さあ、俺の上に座りなさい」

「いや、どちらかが出るまで待っていた方が良いと思うのですけれど」

「カマーン！」

「……はあ。わかりました」

ようやく観念したのか。それとも故には何を言っても通じないとようやく理解に至って達観したのか。

どちらにせよ、円は言われるがままに上に座った。

「うっほ。柔^{やわ}い。ぷに肌だ〜！」

ぎゅっと抱きしめる。ほっぺにほっぺをくっつけ、円のほっぺたの柔らかさを堪能する。

「……はあ」

円は諦めたような溜息をついた。

風呂から出ると、既に夕食がテーブルの上に並べられていた。

どうやら健介が用意したらしい。ぴよぴよ鳴いているひよこがデンプシーロールをくり出している可愛いエプロンを身につけ、紅茶の準備をしている。明らかに似合っていない。

そんな健介に向かって、円はこう言った。

「お父さん。わたしのエプロンを勝手に使わないでくださいって、何度も言っただじゃないですか」

「うっ……すまない、円。わざわざ取りに行くのが面倒で」

ぺこぺこ頭を下げている父親。侍繕家のヒエラルキーが一目瞭然だ。

五分ほど低姿勢で謝り尽くすと、健介は大声でこう言った。

「じゃあ、食事にしよう！」

「あれ？ レンの分はないんですか？」

「ああ、故ちゃん。レンは完全に寝ちゃったみたいで、起きてこなかったんだよ」

「そうなんですか」

「ああ。それじゃあ、速く座りなさい！」

ほらほら！ とハイテンションで着席を促している。そんな明らかにおかしいテンションに、健介の涙ぐましい努力が伺える。

頑張つて食事の場を盛り上げようと、健介は若者向けの話題をいくつも展開する。

きっと娘のために、一生懸命に勉強しているのだろう。頑張るお父さんだ。だけど、自分の性別と歳を考えない、今少女たちの間で話題になっている服飾品の話とかを超熱心に熱く語っている姿は、はつきり言つてキモい。

そんな某電気街や池袋の某道^{ロード}に出没してそんなおっさんは、一〇分くらい経つと、急に話題を変えた。

「そう言えば、故ちゃんの能力つてなんだ？」

「わからないです」

円や健介が、「故は《世界師^{クリエーター}》だ」と言つたのだ。きっとそんなのだろう。

だが自分がどんな能力を持っているのか、皆目^{かいもく}見当もつかない。別人の意識が身体を支配しているからか、肉体に記憶された故（この身体の持ち主だった少女）の記憶も流れ込んでこない。

「きつと《引つ張る力》が故の能力だと思います」

横から、円がそう答えた。

「引つ張る力？」

健介が訊ねた。

「ええ。わたしが学校で故と戦つたとき、地面に押さえつけられました。どんなに動こうとしても、まったく立ち上がれなくて……。わたしの操作していた花たちもすべて動けなくされてしまいました。だから、引つ張る力ではないかと。引つ張られて地面に転ばされ、そして地面に引つ張るようにして押さえつけたのでは？」

円の説明に、健介は『そんなのか？』と訊ねるような視線を向けてくる。

はつきり言つて円の言はまったくの見当違いだ。あれは魔眼の能

力であり、《世界師》^{クリエーター}としての能力では決してない。

じゃあいつたいどんな能力がこの身にはあるのだろうか。……そんなことを考えても、答えなんか出るはずもなかった。

まあ、とにかく。魔眼のことについてはまったく言うつもりはない。自分の情報を無闇に打ち明けるのは、三流のすることだから。

「記憶がないんでまったくわかりませんが、たぶんそうなんじゃないでしょうか」

「そうか。早く記憶が戻ると良いな」

「ええ」

しみみりと空気が重くなった。きっと記憶喪失の話題が出てきてしまったからだ。それは嘘なのに。

嘘だということを知らない健介は、雰囲気をもるく変えようと、再び超ハイテンションになって喋りまくった。

そして、深夜

草木も眠る頃

“彼女”が目を覚ます

閑話 蒼褪めた月の下、女王は謳う

目が、覚めた。

枕元の時計を見ると、まだ丑三つ時。早くに寝てしまったせいか、こんなにも早く目覚めてしまった。

「ふう……」

円は息を吐いた。深く、深く。眠りの底に身体が沈んでいくように。

身体を横に動かす。ぎしり。ベッドのスプリングが軋んだ。

横向けになった身体。その手は、そこにあるべき人に触れることはない。

「……あれ？」

どうしたのかしら。

故と一緒に寝たはずなのに。

ベッドから身を起こし、周囲を見渡す。すると窓際にひとつの人影が見えた。

淡い月明かり。真っ暗な室内の間を、柔らかく包み込んでいる。人影に近づく。逆光でその顔は伺えないけれど、それは故だとわかる。

窓は開かれているようだ。ひゅう、と。冷たい風が入ってくる。ぶるり。身体が震えた。

「……故？」

シンと静まり返った夜。鳥や動物の鳴き声ひとつない。風の冷たさと相俟り、糸のよう^{あいま}にピンと張り詰めているかのように錯覚する。そんな中、円の呟きは。大きく大きく、響いた。

びくり、と。人影は動いた。

どうやら窓枠に腰掛けていたようだ。外に足を投げ出して。人影はこちらを向く。

「あなたには、渡さない」

温度のない声。

死者が語っているかのような。もしくは感情のない機械の合成音声のように、色のない声。

声の主が振り向いたことで、遮られていた分の光が突如流れ込んできた。その眩しさに、反射的に目を細めてしまう。

少しでもその刺激を和らげようと、右手をかざす。

「故は　あたしの騎士様は、あなたなんかには渡さない」

ようやく光に慣れた目が、その人影を鮮明に捉えた。

美しい笑顔。

嘲笑しているようにも見える、冷笑。

本当に美しい。モナリザを見ても、ここまで心を奪われたりしないだろう。その笑みは凄艶せいえんで妖艶ようえんだ。

ごくり、と。唾つばを飲み込む音が、異様に大きく響き渡った。

「あなた、は……？」

どこからどう見ても故だ。だけど、どこからどう見ても故には見えない。

顔の作り、身体、すべてが故と同じ。されどその身に纏っている雰囲気、月と太陽ほどに異なっている。

こわい。

わたしはこの人が、こわい。

恐くて、怖い。

なんて恐ろしいんだろう。そして怖ろしく、畏ろしい。

時間が止まったのではないかと錯覚してしまうほどに張り詰めた空気が流れる。

故はずっと変わらずに円を見下し続けていた。氷の彫刻のようなそして雪の女王のような。そんなものを思わせる、冷たい微笑

みを顔に貼り付けたまま。

第六話 水月良寛

目が覚めると、甘い香りが鼻孔をくすぐった。

そう言えば、昨日は円と一緒に寝たんだっとな。

横を見ると、円は未だ深い眠りにについているようだ。

眠り姫に悪戯をしたくなるのは、男だったら誰でもそうだろう。

今は女だが、心は男のままだ。

抱きついて身体を堪能していると、ようやく円は目を覚ましたようだ。

うつすらと開かれた瞳が故を捉えようと、円は何を思ったのか、がばッ！ と勢いよく飛び起きた。

「あなたは……故？」

何を言っているのだろう。故以外の誰に見えるのか。

「大丈夫か？」

「故、でしょう？」

「ああ」

「そう、よね……」

ナニかを考え込むかのように、円は意識を深く沈み込ませた。胸を揉んでもなんの反応もしない。

とりあえず円が再び覚醒するまでは、たんまりと楽しませてもらう。

朝食を終えても、まだ学校へ行くまでは時間が残されていた。故たちはのんびりと食後の紅茶を飲みながらテレビを見ている。

ちょうど今、テレビでは殺人事件の報道が流れていた。

『埼玉県三笠市にて、昨夜未明殺人事件がありました。被害者は安達郁臣さん、三八歳。遺体は損傷が激しく、警察は犯人が巨大な武器を使用したのではないかと推測しています。』

さて、現場には室裡アナウンサーが到着しています。室裡さーん？」

すると画面は移り変わった。

「はい。えー、現場はここ、四乃浦小学校付近です。さて、それでは発見者の方々から当時のことについて伺いたいと思います。」

Aさん、お聞かせください」

「はい。その日の夜は人通りがいつもよりも多くて、ご覧のように私たち目撃者が多かったわけですが。私は怪しげな老人が被害者の方を殴殺していたように見えました」

「ありがとうございます。それではBさん、お願いします」

「はい。ぼくは筋肉質の青年に見えました」

「Cです。俺は巨大な狼に見えました。狼がその凶悪な爪や牙を用いて……」

「ありがとうございます。えー、このように情報が混乱しており、警察の捜査は難航しています」

そこで再び画面は変わる。

「はい、ありがとうございます。一刻も早い捜査の進展を願います。それでは、次のニュースです……」

……そんなニュースが流れた。

おかしい。どうしてそんなことになっているのか。それぞれ違うものに見えるなんて、何か怪しい薬でも服用したのではないか？

そんなことを考え込んでいる故に、円は声を掛ける。

「おかしいわね」

「そうだな」

そう、おかしい。これは異常だ。もしかしたら、《世界師》が関与しているのではないだろうか。

円もその考えを持っているのか、画面を見る顔は険しい。

レンは残虐な遺体損傷について言われていたためか、顔色が悪い。その傍さに、故は鼻息が荒くなるのを感じた。

「かつわいいー！ どう？ レン。今夜にでもしつぽりと……」

即座にレンの背後に回り、抱きついた。レンは腕の中で小さくな
ってあうあう言っている。

それを見ていた円は、ゆっくりとこう言った。

「ねえ、故。あなた　　レンが女の子に見えるの?」

何を言っているんだ。

こんなに可愛い女の子じゃないか。

何度見返しても。どれほど触れ合う肌に神経を集中させても。子
供特有の少し暖かい体温が、肌に当たる熱っぽい吐息が、現実だと
伝えている。

そう、レンは女の子だ。女の子以外に見えるはずがない。

「当たり前だろ?」

そう言い返した。

だけど、

「……」

円は何も言わず、沈黙を貫き通した。

そう言えば、家に帰らずに円の家に泊まったから、授業の準備な
んでまったくされていなかった。鞆の中は昨日のままだ。

学校に着いてから、そんなことに気づいた。

まあ今から戻るのは面倒くさいから、このままで良いか。そう思
い、教室に足を向けた。

そして教室のドアを開いた。

瞬間、異次元が視界に映った。

「……失礼しました……」

がらがら、ぴしゃっ。

何事もなかったかのようにドアを閉めると、すすすっ……、とム
ーンウォークで後ろに下がる。

ふう。

俺は、疲れてるんだ。

そうに決まってる。

瞼を閉じ、目頭を揉みほぐす。

そんな故を、背後の円は怪訝に見つめる。

「どうかしましたか？ 故」

「いや、なんでもない。そう、きっと。たぶん」

ひとつ深呼吸をして、心を静める。そして、再びドアを開いた。

「星雲……」

「怜治……」

何やら教室の中央で見つめ合っている二人の男。背後に薔薇が見える。

その雰囲気、周囲は固唾かたずを呑んで見守っている。

「……おい。なんだこれは」

やはり見間違えじゃなかった。

故はとりあえず近くにいた少年にそう訊ねた。少年は「ああ……」と故を向く。

「朝からこうなんだよ。何があつたのかは知らないけど、女好きの怜治が女の子に脇目もふらず男に色目を使って。それから星雲が登校してきたら、この調子だよ」

「……まさか」

理解に至ってしまった。

そつだ、怜治たちは昨日の影響がまだ色濃く残っていたのだ。いや、もしかしたら、精神に変容が起きたのかもしれない。

どうやら怜治たちの間で新たな動きが起きたようだ。二人は距離を縮めていく。

「怜治……なんて美しいんだ」

「星雲こそ。その黒瑪瑙オニキスのような漆黒の瞳が……なんてクールなん

だ」

二人は互いの頬に手を沿わせる。そして同時に目を閉じると、二人の顔は近づいていった。

……静寂。

そして、唇と唇が重なり合う音が、響いた。

瞬間、黄色い歓声。主に女の子から。そして極々一部の男からも。

「……ねえ、故。これっていったい……」

円がか細い声でそう訊ねた。

「……言っな。昨日の事件で、ゲイになったんだろ。たぶん、きつと」

そう言うことしかできなかった。

昼休みになり、円と怜治と星雲で昨日のように食事を摂ることになった。今日は、屋上で。

天気が良いから、屋上には結構な人が集まっている。その中で故たちのグループは一際人目ひときわを集めていた。

「……いい加減にしろよ、コイツら」

怜治と星雲がまだ見つめ合っている。

授業中もそうだった。でも教師たちはみな一様に無視していた。

きつと関わりたくなかったのだらう。

イライラして、つい箸を思いつきり握ってしまった。円が作ってくれた弁当。同じく円の家の弁当箱と箸。借り物の箸が、ミシリと悲鳴を上げる。

こちらの怒りが伝わっていないのか、もしくは絶対不可侵の桃色クチュアリー防壁に弾かれているのか。怜治たちは互いに頬を染めながら見つめ合っている。

「きやつ。恥ずかしい……」

怜治は恋する乙女のように星雲から顔を逸らした。星雲はそんな怜治を優しく振り向かせる。

「こちらを向いてよ。きみの顔が見れないじゃないか」

「星雲……」

また顔が近づいていく。

……もう、我慢の限界だった。

バキィー！！ と激しく箸が砕けた。それと同時に、勢いよく立ち上がる。

「……加減にしろ、この野郎！」

天誅！ と叫びながら、ふたりの脳天に拳を振り下ろす。

すると「べむんツ！」という不可思議な悲鳴を上げながら、ふたりは屋上の地面にめり込んだ。綺麗なヒトガタの穴が穿たれた。

「……はっ。俺はいつたい？！」

ようやく正気に戻ったのか。星雲は頭上に疑問符を無数に浮かべながら、穴からよじ登ってきた。

それにしても、一体全体どういうことだろうか。星雲にはまったく傷がない。服にすら、汚れひとつない。……ギャグ補正でも働いたのだろうか。

星雲に遅れること十数秒。怜治も頭を捻りながら這い上がってきた。

「やあハニー。今日も美しいね。どうだい？ 今夜、デートでも」

どこから取り出したのか。いつの間にか右手に出現していた薔薇を口にくわえ、怜治はくるりと無駄に華麗に一回転した。

やはり怜治にも傷ひとつ、汚れひとつついていない。

「……てめエはもう死ね！」

「おべろんツ！」

ぎゅるりぎゅるりと漫画のように宙で二回転三回転する怜治。

その風圧で、啜えていた薔薇が吹き飛んできた。それは故のブレーのポケットに滑り込む。だが宙を華麗に舞う怜治の姿に注意がいつているせいで、故はそれに気づかない。

怜治は、ずしゃ！ と地面にぶつかる、ずざざッ！ と地面を抉りながら滑っていく。だがやはりギャグ補正が効いているよう

で、怜治は無傷で起き上がった。

「星雲！ 結婚してくれ！」

なぜか再びゲイに戻ったようだ。パンチで失われたはずの薔薇を取り出すと、星雲に飛びかかる。

「うわああああああああああああああああ！」

「死ね！」

今度は跳び蹴り。再び空を滑り、やはり無傷で怜治は起き上がる。どうやら今度はまた通常に戻ったようだ。

勘弁してくれ……。

快晴の空は、目に痛いほどに蒼かった。

怜治たちが幾度もジョブチェンジするという波瀾万丈な授業もすべて終わり、ようやく帰宅時間がやってきた。

クラスメートたちはみな一様に疲れた顔をしている。怜治、星雲、未来という三人の変態が一緒にいたのだから仕方ないだろう。

「故。帰りましょう」

背骨をボキボキ鳴らしていると、円がそう声をかけてきた。

「そうだな」

鞆を持って立ち上がる。

何やら視界の端で、服を脱がし合っている怜治と星雲の姿が見えたが、しかしそんな気色悪い光景は全削除し、努めて意識から排除して外へと足を動かした。

「そう言えば、この街には俺たちの他にあとひとり《世界師》クリエーターがいるって言ってたけど、誰だかわからないのか？」

学校からの帰り道。公園に座って、故はそう訊ねた。

円は故の隣に腰掛け、その質問に答える。

「ええ。もともと察知できる範囲は、せいぜいがこの街全域くらい

なんですけれど……。だいたいの方向とかがわかるくらいで、正確なことはわからないんです」

「あっちの方にいるな、とか？」

「ええ」

円はこちらを見ることなく頷いた。

「故が《世界師》^{クリエーター}だっていうことは知りませんでした、この街にあとひとり《世界師》^{クリエーター}がいることはわかっていました。だけど一、二週間くらい前に、もうひとり《世界師》^{クリエーター}が新たにこの街にやってきたんです」

新たな《世界師》^{クリエーター} そいつは敵になるのか、味方になるのか。

はたまた 無関係を継続させるのか。

注意はしておいた方がよい。いざというときのために。

「じゃあそろそろ行きま……。……。ッ！」

突如円は言葉を切り、飛び上がるようにして戦闘態勢を取った。

ひとつしかない公園の入り口を、睨むようにして警戒している。

「どうかしたのか？」

おぞましい気配が近づいてくるのがわかる。粘り着くような。コ

ールタルのように極度の粘性を持った。

だけど、どうして円はそこまで警戒しているのだろう。戦闘経験

なんてほとんどないくせに。昨日故と戦ったときでさえ、自分を過

大評価し敵を格下に見ていたくせに。

「……《世界師》^{クリエーター}が来ています」

その言葉に、精神が深く沈んでいった。

《世界師》^{クリエーター}は《世界師》^{クリエーター}を感じられる。 円たちが言っていた

言葉だ。

はつきり言ってそんな感覚はまったくくない。本当に自分は《世界師》^{クリエーター}なのか？ もしかしたら円たちの勘違いなのではないか？ そう、思ってしまう。

だけど。今はそれどころではない。

ポケットから取り出したカッターを逆手に握る。

風のない日の水面のように澄み切った穏やかな心は、身体の間々にまで感覚が澄み渡っていく。
カツ。

カツ。

カツ。

人通りが途絶えることのない道。
だけど。ざわざわとしている音が、遠くなっていく。
それとは対照的に。小さいはずのひとつの足音は、異常なほどに大きくなっていく。

カツ。

カツ。

カツ。

カツ。

「会いたかったよ、故」

入り口に現れたひとつの影。

……いや、影はふたつ。正確には。ふたつの影は寄り添い合い、あたかもひとつであるかのように見えていただけだ。

両手をいっぱいに広げ、再会を信じてもない神に随喜ずいきの笑みを浮かべながら感謝している。

「てめエは……？」

なぜ名前を知っているのか。なぜ。なぜ。
即座に動けるよう、重心を僅かに下げる。

膝は軽く折り曲げ、余分な力は完全に抜く。

「パパのことを忘れたのか？　……あんなに可愛がってあげたのに」

黒いスーツに身を纏った、父を名乗る男。

漆黒の髪をオールバックにしている。

その顔には見覚えがある。先日までは忘れていたが、レオと会ってから思い出した記憶の底にあった顔だ。

「親、父……」

そう、父だ。自分を捨てた。ひとかけらの愛情すら自分に抱いていなかった、あの。

頭の中が真っ白になる。いや、光の速さで過去の記憶が再生されていくことによって、その際に巻き起こった火花で真っ白に照らし出されている。

「死ねばいいのに」

声が、聞こえる。あまりにも古い記憶のためか、かすれかかっている声が。

ここはどこだ。暗い。あまりにも暗い。窓が完全に閉め切られ、外光の一切が遮断されている。空気は澱み、どこか腐臭にも似た匂いを孕んでいる。

「……」

その中に、故はいた。まだ男だった頃の、幼い故が。

まるで死体にも似た状態。死者のように混濁した角膜を、天井に向けている。身じろぎひとつせず。冬眠しているかのようにほとんど上下しない胸は、本当に呼吸しているのか怪しいほど。

その横には、食べ物らしきものが入った容器が。

離乳食にも似た形容のそれ。だが決して離乳食などではない。米と腐った野菜の滓を水で煮込んだだけのような、不快臭を伴った白っぽい泡を出している料理。

ザザという大きな音。

それと共に、世界が変わる。

『相変わらず気持ち悪いガキね！』

女が、醜惡に顔を歪めて足下の幼子を蹴り上げた。

『ぎ……ッ！』

幼子は苦痛を堪える声を漏らしながら、翼を持たぬ身で中空を滑空していく。そして壁に背中を強打した。

あまりにも強烈な一撃。脆弱な幼児では、内臓を破裂させてもならん不思議ではない。

……それは、故だ。男の。先までの世界で死者に似た状態になっていた、故だ。そして蹴ったのは、故の母。

母はゆつくりと故に歩み寄ると、腹を押さえて悶え苦しんでいる故の髪を右手で掴んで無理矢理顔を上げさせる。

『ったく、なんで早く死なないのよこのクソガキ。とつとと死ぬよ
うに、『故』って名付けたのに』

ぶつん、と言う音。

それと共に視界は断線し、元の世界に戻った。

「なあ、故」

父は一步、足を踏み出した。

顔に歪^えみを浮かべたまま。

「ほら、また一緒になろう？ その胎内^{たない}を、パパで満たしてあげるから」

「は？ 何言つてんだ、てめエは」

マジでキモい。そう言いながら、しっ、しっ！ と蠅を払うように右手を振る。

だってそうだろう。自分を一ミクロンたりとも愛していなかった父が、いかなる豹変を経たのかは知らないが、深夜に恋人に対して言うような言葉を掛けたのだから。背筋がゾゾと寒気を感じ、全身の毛穴が総毛立ってしまったのも無理はない。

父は故の右手を見る。

その視線は左手、両足と動いていく。

「治っちゃったのかい？ せっかく動けないように斬ってあげたのに」

真つ赤な舌で、唇を舐める。

いったい何を言っているのか。故はそんなことをされた覚えはない。虐待は飽きるほどにされたが、切断された覚えはない。

そんなことを考えている故に、父は右手を伸ばす。

「仕方ないなあ。また斬つて、縛り付けてあげるから。パパをいっばいくわえ込んでよ？」

距離が離れていて、故には全然届いていない。

だけどそれを気にすることなく、右手を伸ばし続ける。

そして虚空を掻いたとき、父はパチンと指を鳴らした。

世界に血の赤が奔る。

真円を描くように。

そして、異界を形成した。

噎せ返るような死臭。

地面には落ちることないほどの血が染みこんでいる。

無数に生えた杭。

数多の死体が、串刺しにされている。

血に染まった空。

その色は朱く、

赤く、

紅く……。

「これが、パパの“世界”」

カスィケル・ベイ
串刺林」

故たちに巻き込まれたのだろう。この心象世界に取り込まれた力
ラスたちは、父の声に怯えるかのように羽ばたいた。

ギアアギアという不吉な鳴き声コイヒトが響く。

「さあ、故……お前はパパの肉便器コイヒトだろう？ こっちにおいで」

「ふざ……けるな！」

駆ける。

地を蹴りつけて駆ける。

その姿は、野生のチーターを思わせる。

だが、それでも

父には届かない

「遅いよ、故」

パチン。

鳴らされた指の音に反応するかのように、地から杭が生えてきた。

「つく！」

着地の瞬間に地を蹴って無理矢理に横へ飛ぶ。

急激な方向転換により、足の筋肉が泣き叫ぶ。

だが、それでもなお、逃げられない。

ズンッ！

故を追跡するかのように、いくつもいくつも杭が伸びてくる。地

面がある限り、限界数など存在しないと云わんばかりに。

「故ッ！」

円は“世界”を上書きしようと奮闘する。

だがこの強靱な“世界”は、びくともしない。

「なんて強力な“世界”……」

円は植物を操ることしかできない。もしくは植物を巨大化させた

り……。

つまり、結局は。円は植物がなければ無力だ。

どこを見ても、この荒涼たる大地に、植物など存在していない。

あるのは無数の杭と、貫かれた遺骸のみ。

「いつまで逃げ切れるかな？」

男はその場から一步も動かないまま、笑みを浮かべて故を見つめている。

出現する無数の杭は、この“世界”という名のケーキを切り取るナイフだ。

ギャア。

カラスが、鳴いた。

この世界の一部と化したカラスたちは、串刺しの死体に群がっている。

衣服を一切身につけていない裸の死体。

生殖器と直腸の間、鼠径部に切り口を開けられ、そこから先端の丸い棒が挿入されている。

その棒は胸骨の頂点から飛び出し、下顎に当たっている。

途中までしか挿入されてないのもいる。

その場合は臓器を圧しながら口へと伸びている。

押された臓器によって、腹部がぼっこりと膨れている。

死体の種類は、いくつもある。

全身にまったく傷がないのもいれば、四肢を切断されたものも、はたまた串刺し死体ではないのもいる。

串刺し死体ではないのは、車輪轆きされたものたちだ。

四肢を大の字にされて鉄の車輪に開かされて固定されて手足の骨、関節を粉碎され、ぐにゃぐにゃになった手足を大きな車輪のスポークに編み込まれ、その車輪ごと地面に突き立った杭の先端に刺されて高く高く掲げられている。

四肢を粉碎する際に、勢い余って切断してしまった者たちもいる。だがどちらにしろ、虫の息ではあるが、しばらくは生きていたのだろう。仰向けに車輪に固定されているそれらには、びくんびくんと痙攣した跡が残っている。

それらの、死体の。

眼球を、カラスは喰う。

白く丸い眼球は、カラスに引っ張られ、外気に晒される。

裏側にくっついていて神経の束は、ギリギリと引き延ばされ、プチッ！ と千切れた。

瑞々しいそれが勢いよく千切れた衝撃で、水分がぶるんと飛び散る。

「早く諦めた方が良いぞ」

連続して生え続ける杭たちは、止まるところを知らない^{とど}。

もう優に一〇〇を超えるほどの杭の壁によって、この世界はカッティングされていくケーキのようにどんどん小さくなっていく。

故の、《系認の魔眼》は。

ここでは無意味だ。

たしかに無数のヒトガタと糸が見える。だが、それは実際に地面から出てくるまではわからず、しかも杭は直線に生えてくるために避けながらだと繰り糸を切断できない。

「ははっ。パパは《吸血鬼^{ドラキュラ}》ワキア公ヴラド？世（串刺し公）を喰らったんだ。そのパパが負けるはずないだろう？」

その笑いに反応するかのように、杭の生成速度が急激に上昇した。今まで一本生える程度の速度で、三本。

その速度変化に反応できず、すぐさま周囲を取り囲まれてしまった。

「くそっ！」

魔眼、解放。

虹彩が紫水晶^{アメジスト}へと変色する。

円に展開している杭。その高い高い位置に垂れている糸を切断する。カッターの刃を折り、投擲して。

その場に屹立できなくなった杭たちは、即座に地面へと沈んでいく。

だがその瞬間、投擲直後の硬直時。

故の直下から、杭が一本生えてきた。

「……ッ！」

ジャンプ。だが、一瞬遅れた。

いくら知覚できても、身体が反応できない。

なんとか動くことはできた。思考よりずっとずっと遅れて。

だが、杭を避けることはできず。

腹に、突き刺さった。

「が、ア……ッ！」

口から悲鳴と共に血塊が吐き出された。きっと内臓を損傷したのだろう。

熱い。真っ赤に焼けた火鉢を体内にねじ込まれているかのように。視界が点滅する。

世界が色を喪つて黒白へと変貌くわいはくしていく。

まずい。

この感覚。麻薬をキメてトリップしたかのような、この視界。重傷を負ったときに現れる症状だ。

「ああ……なんて可愛いんだ、故。その、血に濡れて苦痛に歪めている顔。聖女のように美しい……」

うつとりとした表情で、男は故へと歩み寄る。

そしてその手が、故の頬に触れた。

「パパに任せなさい。そうすれば甘美なる痛みと快楽によがり狂つて脳髓がとろけてしまうよ……？」

男の顔が故の顔に近づいていく。

そして、舌で頬を舐め上げられた。

瞬間、

「そこまでにしておけ」

ナニカが、飛来してきた。

それは男の頬を浅く切り裂いた。

「誰だ？ パパと故の邪魔をするなんて」

男は心底鬱陶しそうに発射元を見る。

そこには、健介がいた。

いつものスーツを風にはためかせながら、言う。

「まったく。なにやら“世界”が展開されているから来てみれば……」

「誰だ？」

「そんなことを知る必要はないだろう？ 水月良^{みづつきら}？。まあ、言うなれば……その女の子、円の父で、故の上司だ」

良？と呼ばれた男は、自分以外の男に故の名を口にされたことで気分を悪くしたのか。小蠅を追ひ払うかのように腕を鋭く払いながら指を鳴らす。

その指示に従い、健介の直下から無数の杭がせり上がってくる。

だが、

「無駄だ」

それはまったく効かなかった。

いつの間にか健介の周囲には赤色のナニカが渦巻いて球状に旋回している。

それに阻まれ、杭は無残にも砕け散っていた。

「ちつ。まあいい。今しばらく我慢しててね、故。すぐに迎えに来てあげるから。」

……音遠^{ねおん}。後は任せる」

良？は杭を僅かに生えさせると、その上に飛び乗って故の唇に軽く触れる程度のキスをする、どこかへと消え去った。

良？の隣に立っていた小さな影、音遠は、良？の言葉を受け、故たちと相對せんと立ちはだかつている。

主を失ったことで、“世界”は宙に霧散していく。

そして現世^{うつよ}へと帰還した。

「ごア……ッ、あ……」

ごぼごぼと、故の口から血が吐き出される。

もう刺さっていたはずの杭は消え去っているけれど、穿たれた傷は残っている。

いや、刺さったままだった方がよかったかもしれない。傷口がふさがれていた状態だったのだから。

「円！ 故ちゃんの傷を塞げ！」

「は、はい！」

健介の叫びに、戦闘に一切関わることができずに呆然と突っ立つ

ていた円は、びくりと反応して故に駆け寄った。

ワイシャツを脱ぎ、腹部にきつく巻いていく。

流れ出る血潮に、すぐさま薄青色のワイシャツは鮮血に染まった。大量の血液を失ったためか、故の顔色は悪い。唇は青く変色しており、顔色は青白い。瞳には力がこもっていない。

「く……、」

常人なら失神してもおかしくはない重傷。いや、ショック死するかもしれない。

だが、故は必死に意識を保^{たも}っていた。だがやせ我慢だと容易にわかるほどに、身体は震えている。

「故ちゃん。あとは私と円に任せるんだ」

健介は背広を脱ぎ捨てると、音遠を睨み付けた。それと同時に、再び健介の周囲を赤色の何かが渦巻く。

「……」

音遠は無言のまま。されどこれから暴力を振るわんという意思表示の如く、着ていた魔女じみたフードを脱ぎ捨てた。

……それは、少女だった。幼女と言った方が正確なほど、幼い。

未だ一〇歳ほどの、雪のように白い髪と血のように紅い瞳を持^たた。兎のような。

身を包むはゴシックドレス。真っ黒な。

右手に持つは長大な鎌。死神を思わせる、漆黒の。柄の長さは二メートル八〇センチほど。刃は一メートル三〇センチは優にある。

音遠は半身を取る。ゴシック調の服、その黒いスカートから、シミひとつない白い肌を持った太腿が露出する。

一瞬の静寂。呼吸音が異常に大きく聞こえるほどの。次の瞬間には、音遠の姿はかき消えていた。

ドゴオ！

音遠が消えたのと同じ、すさまじい轟音と共に音遠が姿を現した。健介の許に。

中空から健介に右足を蹴り下ろしている。だがそれは健介を覆う

渦に止められている。

先の音は、それとの衝突音だ。今なおギリギリとせめぎ合っている。

音遠は顔色ひとつ変えることなく、せめぎ合っている右足を支点にくるりと一回転し、その勢いを十分に乘せて後ろ回し蹴りを放った。

再びの轟音。だがやはり健介に届くことはない。

「無駄だ。私の鮮血流壁はその程度では越えられん」

そう言い放つ健介だが、現状を保つのはギリギリなのか、うつすらと汗を掻いている。

それに気づいたのか気づいていないのか、音遠はさらに攻撃を加える。

空いている左手。そして右手に持った死鎌。それを鮮血流壁にぶち当てた。

瞬間、パキッ！ という甲高い音と共に、鮮血流壁はボールをぶつけられた硝子のように砕け散った。

「くっ……、なんて馬鹿力だ！」

堪らず健介は音遠から離れる。音遠はそれを許さぬとばかりに猛打を加える。

なんとか健介は鮮血流壁を再度展開して防ぐが、それもいつまで保つか……。

「く……、あんな幼女が、なんて……すさまじい身体能力だ」

穿たれた腹を右手で押さえながら、故は呟いた。

円は故に肩を貸しながらその言葉を聞くと、驚愕にその相貌を変化させた。

「ねえ、故。あなたにはアレが人間に見えるの？」

「あ、ああ。当たり前……じゃないか」

そう。人間以外の何に見えるというのだ。

円は故の断言に、駄々をこねる幼子のように首を振りながら言う。
「嘘でしょ？ だってアレは」

健介はなんとか鮮血流壁から削られた紅い雫を用いて深紅の槍を形成し、音遠に放った。

音遠はそれを間一髪で避ける。

その隙にもっと距離を開けようと健介は反転して走るが、しかし音遠を相手にしてそれはあまりにも遅すぎた。

健介の眼前、その中空に音遠は出現した。

「狂犬じゃない！」

円の叫びが響いた。

それと同時に、健介の目の前の音遠は漆黒の巨大な犬にその姿を変化させ、鋭い牙で以て健介の右肩に噛みついた。

「ぐア……ッ！」

健介の悲鳴が上がる。だがそんなもの、今の故の耳にはまったく入っていなかった。

「どう、して……」

自分は今幻覚でも視ているのか。どうして。どうして。

今まで幼女だったはずだ。それなのに、どうして巨大な犬にその姿が変わっているんだ。

「おかしいのはあなたよ、故。アレは元から犬の姿をしていたでしようっ？」

円は少しでも健介を護らんと、ラストエデン残されし最後の楽園を展開して

妖花を音遠に向かわせた。

音遠はその鋭い双牙と硬爪で妖花たちを削りながら走る。そして妖花の群れを一直線に突っ走って突破すると、その姿を幼女に変え、手にした死鎌を投擲した。

鋭く回転しながら奔るそれはブーメランとなり、円を描くようにして妖花を切り倒していく。

そして音遠の右手に帰還してくると、それを手に妖花たちに突撃して惨殺していく。

どうやら妖花たちに意識が行ってしまっているようだ。健介には注意が一片たりとも行っていない。

健介は紅い槍を無数に虚空に出現させると、
「穿て」

その命を承り、皇帝を守護せし軍隊じみた無限の槍群は、一切のブレなく、機関銃の弾のように綺麗に整列した。

突撃命令を今か今かと待ちわびている。

「征け」

！！

神の怒りを体現したかのような、一撃。

無数の槍の雨が、鋭く音遠に降り注いだ。

妖花にばかり集中していた音遠はその接近にまったく気づくこともなく、瞬く間に蹂躪された。

「……どうして」

残された、死体は。

判別が難しいが、しかし。

人間の形はしておらず、

獣だと一目でわかる、体毛を持っていた。

いったいどうしてこんなにも大きな獣が幼女に見えたのか。まるでテレビで放送されていた殺人事件のようではないか。

いったい今この世界はどうなっているのか。

そんなことを、思いながら。

「……」

故はついに力尽き、意識を失った。

故が気絶したのと同時刻。

レオはひとり、路上に佇んでいた。

周囲に人影はない。レオしか。それと、月しか。

恐ろしいほどに寒い世界。口から漏れる吐息は白く変色し、宙に霧散していく。

そんな中、レオはぽつりと言葉を漏らす。

「今この都市は、嘘と真実が複雑に絡み合った混沌の世界と化している。それはまるで螺旋のように、蜷局巻きながら……。」

……故。お前は真実を見抜くことが出来るのか？」

その言葉を返すものは存在せず。

その言葉は、宙に霧散した。

第七話 記憶1

世界を変えよう。

それは過去の世界であり、故が今夢に見ている世界でもある。

絶えることのない怒号を聞きながら、故は人形を弄んでいた。

二階でひとり、人形遊びに興ずる。それしかやることがないから。そして、それでしか逃避することができないから。

「……っは！ どうして俺は、ここに……？」

故は急に飛び起きたかのようにはっと顔を上げた。痴呆にでもなったかのように、どうして自分がここに存在しているのかわかっていない。

「俺はたしか、親父の攻撃を腹に受けて……」

そう。そうだ。その後幼女に変化する狂犬と健介の戦闘を見届けて、気絶したんだ。それなのに、どうして……。

だがそんな故の意識は、世界から抑圧を受け、消し飛んでいく。先まで持っていたはずの記憶なんてどんどんとまるで消しゴムで消していくかのように消滅していく。

やがてすべてを喪^{うしな}った故は、過去の故と同化した。

「……！」

「……！」

言い争う声。父と、母の。

故は五歳だ。普通なら両親の愛を目一杯享受しているような年頃。だけどそれは、故には当てはまらない。

どうしてそんなに仲が悪いのか、両親は。毎日喧嘩するならば早く離婚すればいいのに。だけど世間体を気にして、結局はそんなことをしないで日々喧嘩している。

それだけですむなら良い。勝手にやってくれ。だけど、それだけ

で終わるうはずもない。

声が、聞こえなくなつた。その代わりに、足音が近づいてくる。ドストスと、苛立ちを隠さない音が。

バン！ 荒々しくドアが開かれた。

「相変わらず気持ち悪いガキね！」

母親が、故を見下した。文字通り、未だ大人を超えようはずもない小さな故を、遙か高みから。

母は故に近づくと、思いつきり力を込めた蹴りを故の腹にぶちかました。

「ぎ……ッ！」

吹き飛ばされた。まるでボールのように。

壁に背中を強打してようやく止まった故は、ずるずると床に沈んでいく。

「つたく、なんで早く死なないのよこのクソガキ。とつとと死ぬように、『故』って名付けたのに」

腹を押さえて呻く故に、母親は情け容赦なく追撃をかける。

蹴る。蹴る。蹴る。踏み潰す。

女である母に敵わない。故は幼いから。男であろうと、もっと歳を経なくては敵わない。

幾度踏み潰しただろう。母は激しい動きに額から汗を流し、瀕死の故に吐き捨てる。

「こんなガキ、死ねばいいのに。私は初めから産みたくなかったんだよ」

完全なる拒絶の言葉。

それを聞きながら、故は。

痛みをこらえていることしかできなかった。

世界を変えよう。夢の世界ではなく、現実世界に。
現在円たちが何をしているのか。

「ねえ、お父さん。故の様子はどうか？」

寝静まった夜の一角にて、円は健介に言った。

暗い、暗い部屋。電気は付けられておらず、まさに今の円たちの心情を表しているかのような色合いだ。

「……大丈夫だ。消毒して包帯を巻いただろう？」
《世界師》^{クリエーター}たちは治癒力が異常に高いからな。直に治るだろう」

「……そう」

そうは言っても安心は出来ないのか、ゆつくりと椅子に腰掛けると、月を見上げた。

月は何も言うことなく、脆弱に煌めき続けている。

……まだ、円に。

眠りは訪れない。

再び、世界は故の許へと転換する。

六歳に、なった。

未だに暴行は止まらない。毎日毎日、身体中を縦横無尽に痛みが駆け巡る。

もう外に目を向けなくなっただけのくらい経っただろう。

以前は隔絶されたこの孤立空間^{へや}の窓から、外界を眺めていた。日々をひたすらに、楽しそうに享受している人間たち。それが、とても羨ましかった。

だけど、もう。外を見ることはない。

月は遙か遠いところにあるから美しいのだ。心理的にも、距離的にも。

もしも月が手の届く物理的距離内にあるのだったら、あんなにも

美しくは感じられない。太陽も同じこと。

そして、物理的に近いからこそ。暗がりくろがりに潜むことしかできない愚かで脆弱な自分は、あまりの眩しさに全身を焼かれてしまう。太陽に焼かれたイカロスのように。

暗い部屋。窓は完全に閉め切られ、外光は一切遮断されている。

電気もつけていないため、この身は闇に蝕まれ同化する。

ああ……。

今では心の拠り所は、人形しかない。

意思を持たぬ道化。唯一自分に痛みを与えない存在。

もう、どれくらい経ったんだろう。

食事が与えられなくなってから。

今までは一応与えられていた。とてもここが日本であるとは言えないほどひどいものであったけれど。

一日一皿。米と腐った野菜の滓を水で煮込んだような、べちゃべちゃとしたもの。

そんなものであったけれど、今までは用意されていたのに。日付の感覚なんてとうの昔になくなってしまったけれど。もう長い間、何も口にしていない。

身体に力が入らなくなってきた。胃はその用途を見いだせなくなったのか、どんどんと収縮して行っているのがわかる。

それからまた何も口にしない日々は続いていった。

意識が混濁している。ここが現実なのか、それとも空想なのか。境界が曖昧となり、区別することができない。

だけど不意に聞こえてきた怒声で、意識は現世うつりよへと帰還を果たした。どうやら空想世界へと旅立っていたようだ。

「すいません、兄貴」

「いいからさっさと開けるッ！」

「わかりました」

どうやらドアの向こう側にふたりほどいるようだ。誰だかは知らないが。

一瞬の後、轟音。無理矢理ドアが破壊されたようだ。壊れたドアから外光が侵入してくる。闇に慣れきった瞳では、その光は万人を焼き尽くす地獄の業火に等しく。虹彩は、あまりの眩しさに潰れてしまった。

「こいつですか」

「そうだ。おそらくはな」

視覚が一切働かない。でも彼らが自分を見ていることだけはわかる。

「へっ。おいガキ。てめエは売られたんだよ」

ひとりの男が、そう言った。不可視の世界で、嗤いながら。

でも。

でも、それでも。

そうか、と。

ぼくはただ、それだけしか思わなかった。

暴力ばかり受けてきた。他には何ももらっていない。愛情なんか、一度たりとも。

だから、いつかこんな日が来るんじゃないかって。そう思っていたから。

「てめエのババアは男に貢ぎまくって借金してよ。ジジイも同じく女に貢いで返せない借金を抱え込んで。結局お前を残して夜逃げだよ」

誰かが手を引いた。強く、強く。

もう抵抗する気なんてどこにもない。そんなもの、とうの昔に死んでしまった。

思いつきり引つ張られて、軽すぎるこの身体は容易く浮き上がった。勢いがつきすぎて、引いた人にぶつかってしまった。

そうしたらその人は思いつきり殴ってきた。鈍器か何かだろう。骨伝導で、骨が碎ける音が頭から響いてきた。

血が流れる。

もう痛みはどこかに置き去りにされてしまったのだろうか。それともただ痛みが強すぎて知覚できないのか。とにかく痛みなんてまったく感じられない。

意識が、混濁していく。

……いや、違う。

どこかへと、向かっていく。

この身体から、解放されていく。

「たく、このクソガキがよ。……おい、てめエはこの家ん中のモンをすべて運び出せ。売るからな。そうしたら家売っ払っちまえ。俺はこいつを連れて行く」

相変わらず、眼球は何も映さないまま。

どこかへと連れて行かれていく。

曖昧模糊とした世界。肌で感じられる、見えない常闇の世界。

それがどこなのか、わからない。

わからないけれど。そこへ向かって、身体から引っ張られていく。

それを最後に、一瞬だけ感じ。

意識は、断線した。

「……っは」

眠っていたのか。びくんと故は顔を上げた。

おかしい。先ほど自分は男たちに頭を鈍器か何かで殴られたはずだ。なのに、今いるここは……。

「どうした？ 故」

眼前の男が、首を傾げながら訊ねた。

彼を見て、故は頭の中がすうつと冷えていくのがわかった。混乱していた思考が沈静化されていく。

そうだ。

ここは、カブル。

勝利を祝って飲み交わしているのだったな、仲間と。

目の前の男はイヴァンだった。師であり、父であり、兄であり、相棒であり、……そして親友である青年だ。

「いや、なんでもないよ」

「そうか。長の戦い^{なが}が終わって気を抜くのも良いが、おかしくなるくらいに気を抜いたらダメだぞ」

「わかってるよ、イヴァン。あんたじゃないんだ。それに、気を抜きすぎてるのはあんただろ？ 俺は知ってるんだぞ。さっき、花売りの幼女に声を掛けてただろ」

「うっ……、それは」

イヴァンは汗を流しながら言葉を濁した。

何を言わなくてもわかる。イヴァンは女についても師匠であり、また同士でもある。同じロリペド同士、言葉を交わさなくても通じ合うものがある。あの娘はイヴァンの好みにぴったし合う子だったからな。

故は笑う。声を上げて。こんなに笑ったのはいつ以来だろうかと、頭の片隅で思いながら。

ひとしきり笑うと、手に持ったグラスを掲げた。イヴァンも同じく。そして勝利の乾杯を。

酒が、グラスから零れ落ちた。

がちやり。

鎖のこすれる音が、遠く聞こえた。

気がつくと、見知らぬ天井が視界に入った。

どうしてこんなところにいるのか。思い出そうと試みても、まるでミキサーでもかけたかのように、ぐちゃくちゃとして思い出せない。

先ほどまで仲間と酒を飲んでいたような……。いや、頭を殴られたんだったか？ とにかく、記憶が混乱している。

とりあえず起きよう。そう思って、身体に力を込める。だけで起き上がれない。

「何、が……」

首を動かして身体を見る。すると四肢が縛鎖でベッドに括り付けられていた。

どうしてこんなことになっているのか。わからない。わからない。どれだけ力を込めても、解放されることはない。

がちやり。鎖がこすれあう。

頑丈な。どれだけ暴れようとびくともしない。

がちやり。永遠と、縛鎖はこすれ続ける。

急に扉が開かれた。薄暗い室内に眩いほどの人工的な光が射し込む。

ふたつの人影。逆光で姿を伺うことはできない。

「
」

不可思議な言語。鼓膜まで届くことができない。果たして何を言っているのか、皆目見当もつかない。

意味不明の言葉を口にしていたひとつの影を、その傍らの影が遮る。

「落ち着けよ」

その言葉に、影は口を閉ざした。

日本語を口にした男は、故の拘束されているベッドに近づく。

「よオ。気分はどうだ」

相変わらず顔が見えない。黒い絵の具で塗りつぶされたかのようにがちやり。気分なんてよくないという無言の怒りを代弁するかのように、一層激しく鎖が泣いた。

「ここはどこだ？」

「どこだと思う？」

疑問に疑問を返された。男は馬鹿にしているかのように、呵呵^{かか}と嗤^{わら}う。

「ここは中東の……まあ国名なんてどうでもいいか。ここでは今内戦が勃発しててな。うちの組織も人員がまったく足りてないんだ。だから日本の、お前を拉致してきた組が売ってくれたんだよ」

ようやく光に慣れてきた。しかし男の顔は見えない。

だけど。不思議なものが視界に入った。

虚空を漂っている、不可思議なヒトガタ。真っ黒の。

両手はまるでピアノリストのように差し出されている。その指先からは糸が出ている。

男の背後に、そしてあらゆるものの背後に、まるで守護霊の如く佇んでいるそのヒトガタ。指先から伸びている糸は、眼前のものに繋がっている。

「いや、大変だったぜ。連れてこられたお前は、心肺停止状態だったからな。わざわざ治療してやったんだ。ありがたく思えよ？」

その言葉に、忘れ去られていた痛みが頭部に牙をむいた。

痛い。ズキズキと痛む。

ああ。

ああ、これは。死んだせいかな。

よくある話だ。一度死んでから生き返ると、もしくは脳にダメージを負うなどの重傷を受けると、人間は超能力に開花する。

故は脳に大ダメージを受け、一度死んだ。そのせいで、このヒトガタたちが見えるようになってしまったのだろう。

「まあどちらにせよ、忠実な奴隷人形に仕立て上げてやるがな」

男は何かを握っている右手を挙げた。指先が軽く動いている。

するとそのナニカから液体が吹き出た。軽く。そう、ほんの少しだけ。

男は首筋にそれを突き刺した。

液体が、血管から浸入してくる。血流に乗り、全身を蝕んでいく。

「あ、あ……」

脳にまで流れたのか、だんだんと意識が混濁していく。精神に罅が入り、新たに再構築されていく。

頭部の痛みも、どこかへと置き去りにされた。

どれだけ時間が経っただろう。わからない。まあなんにせよ、時間なんてどうだっていいことだが。

あの日、俺は作られた。

薬による暗示や洗脳によって。

そんなことすらどうでもいい。今はこの組織の使える駒になれるように、日々研鑽を重ねることの方が重要だ。

切れかけの照明。蛾がぶつかり、ジジと気持ち悪い音が響いている。

「ここにいたか、故」

背後から声がかけられた。

振り向かなくてもわかる。この組織の中で日本語を扱える者なんて、故の他にはMr・Hしかいないのだから。

結局振り返ることなく、ナイフを振るい続ける。がむしゃらに、しかし乱雑ではなく。

「そろそろお前も使える頃になってきたな。今日から出るぞ」

Hは答えない故を気にした風もなく、そう言った。

その言葉にようやく振り向いた。

ようやく扱ってもらえる。そのことに、もう表情筋が消失してしまったのではないかというほどに動かない表情は相変わらず凍り付いたまま、錆び付いた心に微かな喜びを湧き上がらせながら。

無機質な電子音。

Hの懐から聞こえてくる。

Hは懐から携帯を取り出す。

そして内容を確認すると、こう言った。

「時間だ。行くぞ」
殺し合いが、始まる。

閑話 少女の願い

熱い。

お腹が、熱い。

「ふふっ……」

人々が寝静まった深夜。

狂ったような嗤い声が、侍繕邸に静かに響き渡る。

「痛い……。ねえ、痛いの……」

窓枠に腰掛け、足を外にぶらつかせている少女。

故。

故はこの暗闇の世界に散らばっている宝石たちを見下ろしながら、
呟く。

腹の傷を、右手で押さえながら。

「ねえ、故 あたしの、騎士様。お父様がきちゃったよ」

重傷であつたはずなのに。ひどい痛みにうなされそうなほどの
に。故は汗ひとつ掻くことなく、笑みを浮かべている。
くすくすと、可愛らしいその相貌を笑みに歪めている。

「故。騎士様。あたしを 助けて」

故は、謳う

己^{おの}が騎士への純粋な想いを

一切の、穢れなく

第八話 記憶2

一〇歳に、なった。

この組織に入ってから、誕生日なんて祝ったことがない。……いや、ここに来る前も、祝ったことなんてなかったか。ただの一度も。毎日戦争、戦争、戦争。血と硝煙に濡れる日々。それも、もう終幕が近い。

「……、……」

敵の嗤い声が、遠く聞こえる。

もう何を言っているんだか、まったくわからない。

視界は霞がかったかのように、かすれきった世界を映し出している。

ああ。

死神の足音が、聞こえる。

もう死が近い。ひたひたと、巨大な死鎌デスサイズを携えた黒い彼が歩み寄ってくる。

思考が途切れ途切れになっていく。
体温は熱を喪い、氷のようにつしな冷たくなっていく。

その、視界の中で

敵を、誰かが

殴り飛ばしたのが、見えた

「……い。おい、故」

耳元で突然鳴り響いた轟音。鼓膜を破壊しかねないそれに、故の視界は音を立てて揺れる。揺れる。

いったい何事だと周囲を見渡す。そこには酒を手に持ったレオとイヴァンがいた。

「い、イヴァン？　どうして、生きて……。お前はもう死んだんじゃない」

「はあ？　故、さっきからどうしたんだよ。調子でも悪いのか？」
イヴァンは心配そうに顔を覗き込んでくる。それに対し、なんでもないと、故は力なく首を横に振った。

そうだ。イヴァンが死ぬはずじゃないか。いくら能力持ちじゃないと言え、イヴァンは強いからな。

俺がどうかしてみたいだ。

イヴァンは故が無事だとわかり、ほっと一息ついた。

「……そうか。まあ安静にしてろよ。僕は離れてるからよ」

そういうとイヴァンは酒を片手に去っていった。ここはカブル。今は勝利を祝って仲間と酒を飲み交わし合っている。向こうにいる仲間たちと酒を飲みに行ったのだろう、イヴァンは。

残されたレオは、故に声を掛ける。

「それで、故。どうしてお前はまだここにいる」

「は？」

いったい何を言っているのだ、レオは。

そんな故の疑問を知ってか知らずか、レオは言葉を続ける。

「ここはお前のいて良い世界ではない。そして同時にお前はここにいるべき存在ではない」

どういう、意味だ。

どうして、俺が……。

「これを言うのも二度目になるがな」

「二度目？」

嘘だ。初めて聞いたはずだ。

レオは未だ何もわかっていない故に何を思ったのか、重い息を吐き出しながら首を振った。

「お前にはふたつの道が残されている。ひとつはこのまま幸福な夢を見続ける。もうひとつは、すべての真実を知ることだ」

「しん、じつ……？」

「そう。真実だ」

そこまで言うのと、レオは手にした瓶ビールをグイと一気に飲み干し、立ち上がった。

反転し、歩いて行く。だがすぐさま立ち止まると、振り返ることなく言葉を放った。

「お前は真実を知った際に何を思うのか。……見させてもらっぞ」
今度こそ、レオ 《万能公》は立ち去っていった。

気がつくのと、知らない天井が広がっていた。

記憶は混濁していて、どうして自分が今ここで寝ているのか、まったくもってわからない。

もう、疲れた。

意識的に何かをする余力などない。本当に、何があったのか。心の底から疲れ切っていて、何もしたくない。

ただ呆々と天井を見上げ続けていた。

どれだけ時間が過ぎたのだろう。

ドアが開かれ、何者かが入ってきた。

「目が覚めたみたいだね」

緩慢な動きで、首から上だけを動かして横を見る。

そこには、ひとりの青年がいた。

真っ黒い衣服で統一された服装。普通ならセンスがないと言われそうだが、しかし青年にはなぜか異様に似合っている。

青年は耳につけられた銀のイヤリングと首につけられた同じく銀のネックレスを笑みで揺らしながら口を開く。

「覚えてるかな？ 僕たちの組織がきみの所属していた組織を滅ぼしたんだ」

ああ。

たしかにそんなことがあったような気がする。

だけど今更そんなことに思い至っても、何を感じることもない。

青年は何かを確かめるかのように数秒故を見つめると、言葉を続けた。

「そのときにきみを殺そうとした同僚を止めて、僕が助けたんだ。

何やら様子がおかしかったからね。そうしたら、薬漬けにされてるじゃないか。それを知って、急いで組織に戻って治療したんだよ」

それにもなんの反応も示さない故を見て、青年は今はまだ早いかなと思ったのか、息をひとつ吐いて反転した。

そして足を進める。だがドアの前で一度立ち止まると、振り返ることなくこう言った。

「僕はイヴァン。イヴァン・アキモヴィッチ・ロギノフだ。これからよろしく頼むよ」

そうして、今度こそ。イヴァンと名乗った青年は、ドアを開けて出て行った。

それから、一年が経過した。

イヴァンはあれからよく見舞いに来てくれて、故は空虚だった心を次第に埋めていくことができた。それを成す鍵となったイヴァンを慕い、結局一年かけてようやく完治した故はイヴァンの所属している暗部に入るようになった。

イヴァンは、無類の女好きだった。それも、熟した果実ではなく、青い果実が好きな。

ストライクシーン

八歳から一二歳が守備範囲であるイヴァンの影響を受けて、故も女好きになった。それも、イヴァンと同様、小さい子が好みの。まあ故は母親に暴行されていたという過去があることも関係しているが。

故はイヴァンにたしかに影響された。だが実際にはまったく同じではない。イヴァンの守備範囲は八歳から一二歳だが、故の守備範

困は六歳から一五歳。イヴァンよりも一回り広い。

だがイヴァンとまったく同じ点はある。それは、一〇歳の少女が最も可愛らしいということだ。それをお互い確かめ合い、熱い握手を交わしたものだ。その日の夜はふたりで酒を飲み交わし、お互いの好みについて熱く語っていた。

イヴァンはそれだけでなく、性格が非常に軽かった。

初対面では非常に物腰穏やかな好青年風であつたのに、蓋を開けてみると、正反対だった。好みの少女を見るとすぐにナンパするし、セクハラもする。それに普段の性格は軽く、いつもおちゃらけていた。まあシリアスなときはしっかりと決めていたが。そんなところにも故は影響されていた。

そんな、幸せな日々。

だけどそれは、長くは続かなかった。

暗部に入って一年が経過した。

その間、色々なことがあった。ここアフガニスタンで起きている内乱、様々な組織が抗争しているのだが、ついに故たちは勝利した。カブールで勝利の酒を交わし合ったりもした。

その日は、故の一二歳の誕生日だった。

以前から組織は真つ二つに割れ、争いを起こしていたのだが、大事になることもなくそのまま続いて行っていた。

だがその誕生日の日、事件が起こった。

「この争いに勝つためには、お前が必要だ。我らが組織、星の叡智派教団内でも数少ない能力持ちであるお前がな、故」

系認の魔眼を保有していると周知されていた故は、双方から勧誘された。

だがどちらに入る気もなかった。イヴァンが中立を保っていたから。

だがそれに業を煮やした双方は、故を半殺しにして無理矢理操る

うと考え至ってしまった。

「抵抗しても無駄だ」

能力持ちたちが、故を取り囲んだ。

故の武器はサバイバルナイフ一本。全方位から無数の能力を放たれれば、いくら強力な魔眼を保有していても、勝ち目はない。

く、と。故は口端から漏らした。

だがそんな故に容赦をするはずがない。

「行け」

その言葉に、能力が放たれた。

視界を埋め尽くすほどの奔流。数秒もせずに命は絶たれてしまうだろう。

だが。その瞬間、故は身体に衝撃を受けた。

「……？」

是面に背中を強打して揺れた脳に定まらない視線で周囲を見渡すと、イヴァンが立っていた。全身から流血しながら。

「イヴァン?!」

どうやらイヴァンが間一髪間に入って故を護ったらしい。

イヴァンは虚ろな瞳を故に向け、力なく笑む。

「よかった……無事だったか」

「イヴァン……」

涙が溢れる。涙腺が壊れたかのように、止めどなく。

イヴァンはひとつ大きな血塊を咳と共に吐き出す。

「ごほつ。……故、逃げる」

「いやだよ！ イヴァンも早く病院に行こう。早くしないと、怪我が……」

「クソッ、邪魔しやがって。イヴァンは能力持ちじゃない。殺せ！」
再び迫る、能力の奔流。

イヴァンは故の身体を強く突き飛ばした。強く、強く。

「生きてくれ……」

耳に届いたイヴァンの言葉。

その後にもまだ何か言葉が続いていたのかはわからない。ひどい轟音が周囲を駆け巡ったから。

「イヴァン……」

最後にひとつ、涙を流し。故は駆けだした。

イヴァンの最後の言葉。それが心の奥底に楔となって。

その呪いによる衝動 “ 生きたい ”。その衝動に急かされるように。

そうして、故は。

逃げ出した。

暗部から逃げ続けて二年が経過した。

どうやらその間に組織内で対立していた派閥は仲直りしたようだ。そして、超能力者を集めて力を増そうとしているらしい。

もう対立していないのなら、逃げる必要はない。戻れるのだから。だがイヴァンを殺したあの組織に戻る気にはならない。

だから、逃げ続ける。

そんな故を、組織の情報を持っているからと、組織は集めた超能力者を派遣して殺そうとしている。

逃げ続けて、逃げ続けて。

そしてついに、追い詰められた。

「残念だったな、水月故。指令なんだ。ここで殺す」

あまりにも数が多すぎる。故を取り囲むようにして、能力者が狙っている。

「くそっ……」

魔眼を解放し、全力で抵抗する。

……だが、結局。敵うわけもなく、返り討ちにあった。

「が、は……っ、あ……」

腕は無残にも焼け爛れて皮膚が捲れ上がっている。胸元には氷柱が幾本も突き刺さっており、刃物でも使ったのか、深い切創が無数に刻まれている。露出したピンク色の筋肉は呼吸と共に収縮、弛緩を繰り返しているのが如実にわかる。

またひとつ、咳と共に血塊を吐き出し。眼前に悠然と佇んでいる青年を、地面に背をつけたまま忌々しげに睨み付けた。

「まさかこれほど粘るとは。……少々、我々の力を過信していたようだ」

青年は故から目を離し、周囲を見渡す。

そこかしこには、故によって殺された死体が地面に転がっていた。ぱっと見でも一〇は超えているであろう。月が闇に喰われ尽くしたこの夜では、正確な数を数えることは叶わない。

暗がりには浮かび上がるそれら糸認の魔眼によって殺された死者は急所を一撃で破壊されている。

再び故に視線を戻すと、青年はこう話しかけた。

「凄まじい能力だな。おとなしく我らに従えば、貴様のその能力を有益に使役してやったものを……」

「ぐ……、」

糸認の魔眼を解放する。途切れていたその活動を再開させる

だが、能力を発動させたはいいが、もう身体を動かすことは出来なかった。どんなに青年の首筋にナイフの刃を奔らせようと試みても、壊れた己の肉体は指一本たりとも動くことはない。

「惜しいな。実に惜しい。なあ、水月故」

故は、もう返事を返すことすら出来ない。

そんな故に向けて青年は右手を向け、

「それでは、さよならだ」

そうして、俺は。

死んだ。

（助けて……騎士様、あたしの騎士様……助けて……）

そんな声を、どこか遠くに聞きながら。

そうして

「じじ、は……？」

故は、再び

「なんで女になってんだ　　ッ！！」

目を覚ます

第九話 邂逅

暗い。

ここは、どこだ。

何もない世界。闇に支配されていて何を見ることもできず、時間も重力も何もかもが存在していないかのように身体がふわふわと浮いている。

いったいどれだけそこで漂っていたのだろう。眼前に純白の光の渦が現れた。大きい。まるでブラックホールのように、人間なんかとは比較にならないくらい。

このままここにいても仕方がない。終わることない無が永劫続いていくだけ。

「……」

故は覚悟を決めると、その光の中に飛び込んだ。

視界がホワイトアウトし、そのあまりの眩しさに故は反射的に目を閉じた。

そしていったいどのくらい時間が経ったのか定かではないが、ようやく瞼越しに感じる光に刺激を受けなくなったために目を開けた。

部屋？

ぬいぐるみとかが置いてある。

たしかにここは、故という少女の部屋だ。

窓から見える景色は、朝方のもの。遠くまで見通せる。

だけど。そこには生命の息吹が感じられない。なんの音も聞こえない。

通りには誰も歩いていない。林立している家々にも、人の気配はまったくくない。

ふと、背後から視線を感じた。

振り返ると、故が憑依した少女、故がいた。八〇センチほどの大きさの騎士人形を胸に抱いて、美しく笑んでいる。

まるで本物の騎士のように。その騎士人形は、人形であるのに本物の小型の甲冑や鉄仮面を身に纏っている。

「お前、は……？」

はつきり言って戦闘力なんて微塵も感じない。

されど、それとは関係なしに。重い雰囲気、攻めてくる。まるで傘を差さずに雨の中を歩いていて、着ているコートが水を吸って重くなっていくかのよう。

少女（故）は少年（故）に気がついていないのか、抱いていた騎士人形を両手で抱き上げ、腕を伸ばして語りかける。

「騎士様。あたしの……あたしだけの騎士様。くすくす。ねえ、あたしを護って……」

騎士人形はその言葉に首肯するかのように、自力では動くことが叶わないはずの身体を微かに動かす。

すると騎士人形の被っていた鉄仮面ががちゃりと音を立てて砕け散った。

ゆつくりと落ちていく破片は、床に衝突すると、砂のように細かく粉碎され宙を舞う。

「そ、れは……」

露わになった、騎士人形の素顔。

それは可愛らしくデフォルメされた、少年（故）のもの。

少年（故）は空気が重くなったように感じた。

錯覚ではない。本当に重い。まるで空気中の成分の割合が変化し、なおかつ密度が急激に上昇したかのよう。

重すぎる空気は、あたかもヒマラヤの頂上のようになかなか酸素を取り込むことができない。フルマラソンの直後のように、息が荒くなっていく。

「騎士様。騎士様。騎士様。ふふふつ。ねえ、騎士様あ……」

恋する乙女のように嬌声をあげている。

心臓の鼓動が異常に大きく感じる。

ああ。もしかしたら。

激しすぎる心臓が、破裂してしまうのではないだろうか。

気づかない少女（故）に変わって騎士人形がギチギチと錆び付いた絡繰りが駆動するかのような音を立てながら、少年（故）の方を向いた。ゆっくりと。

少年（故）と騎士人形の視線が交差する。

すると少女（故）も気づいたようで、少年（故）に視線を向けた。

「ああ、騎士様あ」

少女（故）は少年（故）に駆けより、頬に手を伸ばす。

触れた指先は、氷のように冷たかった。

「お前は……誰だ？」

かすれたその声を聞き、少女（故）は「くすくす」と声を漏らす。
「知っているはずよ、騎士様。だってあなたは……」

そこで世界が揺らいだ。水面に広がる波紋のように。蜃気楼のように。

そうして、少女（故）は言葉の途中で消え去った。

結局最後まで言葉は紡がれることなく、

少年（故）はひとり、この世界の中に取り残された。

あれから、どれだけ時間が過ぎたのだろう。

腹が空くこともない。疲れを感じることもない。

死後の世界はこんな感じなのか、と。そんなばからしい考えを抱いてしまうほど、永遠と。

だがそれにもついに変化が訪れた。

「……」

部屋の扉が、音もなく開かれた。無言のまま。

入ってきたのは、少女、故。

死んだ魚のようななんの感情もこもっていない瞳が、心を揺さぶ

る。

少女（故）はふらふらとした足取りで歩みを進めるが、しかし足をもつれさせ、部屋の中ほどで倒れ込んでしまった。

「う……ぐすつ……あ、げほっ！」

ようやく見せた感情は、慟哭。

そして、少女（故）は口から血を吐き出した。

「お、おい……？」

げぼげぼと、一リットルは優に超えているほどの血が広がっていく。床に歪んだ円形に這っていく。

いったいどうしたというのか。

よく見ると身体中に傷が広がっている。

それを見て少年（故）は少女（故）に触れた。無事を確かめるために。

だが。

だが、指先が少女（故）に触れることはなかった。

まるで蜃気楼に触れようとしたかの如く、指先は少女（故）の身体を透過し、宙を掻いた。

「何が……」

わからない。何が起きているのか。どうして触れられないのか。いくら触れようと試みても、決してそれが叶うことはない。

ありえないほどの血が部屋を深紅に染めると、もう出血多量で死んでいて当然のはずの少女（故）は力なく立ち上がり、定まらない足取りで机に向かっていった。

「助けて……誰か、助けてよ……」

椅子に座ると、少女（故）はノートを取り出し、今にも泣き出しそうな声で呟きながら、何かを書き綴っている。

少年（故）は少女（故）の背後に歩いて行く。そして、後ろからそのノートを見た。

『水月故の騎士様』

昔々。あるところに、水月故という少年がいました。

故は親に望まれて生まれたわけではありません。そのため、毎日ひどい暴力を受け続けていました』

なん、で

俺の、過去が

いや、思い返してみれば不思議ではない。ここは、夢の中なのだから。

そう思い至つてようやく平静を取り戻すと、かなりの時間が経過していたようだ。窓から覗く世界は闇に染まり、夜天には星々が煌めいている。

再びノートを覗き込む。

『そして少年、故は水月故の騎士となることを誓い。』

少女、水月故は、彼女の……彼女だけの騎士、水月故に護られながら、永遠に幸せに暮らしていきました』

少女（故）はそこでペンを置くと、ノートを閉じて机の中にしまった。

そして、また

世界が、揺らいでいく

第十話 終局へ向けて

目が覚めると、頬が濡れていた。

なぜだかはわからない。どうして濡れているのか。悲しい夢を見たわけでもないのに。

身体が、重い。

鉛のように重い身体が、真冬の深雪に深く深く沈み込んでいく。そう錯覚してしまうほどに、柔らかなベッドに身体が沈んでいく。数秒の間、呆と天井を見上げる。

視界に映るのは、白い天井。幸せな夢を連想させる真っ白に浄化されたそれは、今この現実が淡い夢であり、実際では絞首刑の前日の咎人のように小さく震えながら死を待っているのではないかと思わせる。

そんな錯覚を消し去るため、そしてなぜだか悲しみにささくれ立っている心を静めるため 故は静かに瞑目した。

朝の眩しい太陽は燦然と輝き、故の瞼の裏を嬉々としてオレンジ色に染める。

ゆつくりと瞼を押し広げると、焦点の合った虹彩を痺れさせるほどの光の洪水が窓から射し込んできた。

それに照らされた白い天井。視界いっぱい存在している。だけでもうそれを見ても、莫迦な考えに囚われることはない。

震える右手で頬の湿気を拭くと、ひとつ息を吐いて窓から見える景色に視線を移した。

遠くに見える、景色。

遠くに見える深い森と雲ひとつない青空、そして元気に日々を謳歌している人々の騒がしい歩みが、窮屈な窓枠に切り取られ、押し込められている。

それは一側面から見ると、強制的に押し込められている残忍な行為だ。だが別の側面から見ると、それは普通なら周囲に埋もれてし

まうところを、押し込めることによって隔離し、周囲との混同を防いでいることから、護っているとも言える。

ああ。なんて。

なんて平和な世界なんだ。

たしかに今自分は命を狙われている。《クリエーター世界師》の男　父、水月良？に。

だけど生前は、たしかに楽しい日々も一時期あったけれど……、そのほかは自分の記憶の中でほとんどすべての割合を死が占領している。毎日毎日死神と肩を触れ合わせ、何度も何度も、それこそ数え切れないくらいに死鎌デスサインズの冷たい刃先を首筋に滑らされた。

それに比べれば。

なんて幸せな日々なんだろう。

望んでも届かなかった夢。触れることすら、指先を伸ばすことすら叶わなかった、遙か天空の城。

それが今、この手の中にある。

失いたくない。

この、今を。

握りしめられた拳は、硬く。硬く。

今を生きるために、そして自分の身を守るために殺し尽くそうと、再び決意を固めた。

「あら、故。起きたんですね」

ふと気づくと、円の声が聞こえてきた。

窓から視線を外して横を見る。円はもう制服を着てそこに立っている。

「まどかん？」

「ええ。大丈夫ですか？　昨日、大怪我をなさったのですが」
腹を右手で撫でる。

痛みはない。あれだけの怪我だったのに、まったく。逆に、ち

よつと痒いくらいだ。

シャツを捲つてみると、かさぶた瘡蓋ができていた。

「ああ。大丈夫みたいだ」

「よかった」

円は心底ほつとしたようにひとつ息を深く吐いた。

「それで、昨日……だっけ？　どうなったんだ？」

たしか自分は腹を穿たれたはずだ。その後は意識が混濁し、失神してしまつた。

今ここで無事にいるということは、助かつたということだろうが。

「お父さんが助けてくれたんです」

「健介が？」

そうだった。思い出した。嘘と真実の螺旋の最中にて、父が去つた後に健介が音遠と戦つたんだ。

「ええ」

円は表情を硬く引き締め、続ける。

「お父さんが話があるそうなので、来て頂けますか？」

「わかつた」

リビングに行くと、健介はコーヒーを飲みながら新聞を読んでいた。

中に入ると、こちらに気づいたようで、新聞をテーブルの上に置いてこちらを見た。

「起きたか」

「はい」

席に座る。

するとそれを待つていたようで、健介は口を開いた。

「まずは、助かってよかった」

「昨日はありがとうございます。来て頂けませんでしたら、死んでいたことでしょう」

健介は首を横に振って否定する。

「いや、私は謝らなくてはいけない」

「？」

謝られることなんて、ないと思うのだが。実際に助けてもらったし。

父の能力は、系認の魔眼との相性が悪い。能力自体が速度と弾数があり、なおかつ攻撃の方向が悪すぎる。

健介は椅子に座り直し、口を開く。

「水月という名前には聞き覚えがあつてね、昨日調べてみたんだ。そうしたらきみの父親　水月良？　と言ったが、彼が脱獄したという事件が数ヶ月前にあったんだ。それを覚えていたら、事前にわかったのかもしれないんだが……」

「わかった？　別に親父のことを知ってても、襲撃についてはわからなかったと思うんですが」

そうだ。人物を知るだけで未来の行動を予測できるのなら、そんなに楽なことはない。

それにしても。

親父の奴、警察に捕まってたのか。

まあ当然だろう。自分の子供を虐待するような奴だ。消え去った後も何かやばいことをやらかしたのだろう。

それにしても、どうして。

親父の奴は、姿が変わった俺を俺だとわかったんだ？

レオもそうだった。だがレオは《万能公》だ。彼なら知っていても、わかって当然だと思ってしまう。だが親父が自分を息子であった故だと判断した理由は思いつかない。

どれだけ悩んでも答えは見いだせるはずもなかった。

健介は首を振って故の言葉を否定する。

「いや、彼ならわかるんだ。彼は故ちゃんを愛しているからね。異常なほどに。そのせいで、故ちゃんは大怪我を負って入院していたんだ。だから彼がこの街にいるってわかってたら、また故ちゃんを

襲つてきみを手に入れようとするって、事前に予測できたはずだ」

うん？

何か、おかしいぞ。

会話が噛み合っていないような気がする。どこか。

そう。親父が自分を愛しているはずなどない。そうに決まっている。痛めつけることが愛情表現だという倒錯者（ドＳ）でもない限りは。

だがまだ自分でもわからない。本当に噛み合っていないのかは。どことなく、なんとなくそう感じたような気がするただけであるからだからこそ故は、ズッシリと心の底に何か不明瞭なものが沈み込んでいくのを感じながらも、会話を続けていく。

「と言うことは、この街にいるはずだったもうひとりの『クリエーター世界師』
って言うのは……」

「彼 水月良？ だろう」

俺は、勝てるのか。

相性の悪い、相手に。

自分の身を、果たして守れるのか。故は拳を固く握りしめる。メキツと音が響き渡る。

そんな故に、健介は薄く微笑みかける。心配はない そう無言で言っているかのように。

「大丈夫だ。私も手伝う。言っただろう？ 組織の人間が襲われたら、組織で以て敵を排除すると」

たしかに言った。

それなら安全性が、ぐっと高まる。

「生憎今は組織の人間たちは他のところに出払ってて、今ここにいる三人しかいないから、彼らは今更呼び寄せても時間がかかってしまう。だから彼らには、この街以外を監視してもらおう。水月良？ がこの街から出たら、他の地域に行かなきゃならないからな。そうなれば、情報が入ってくる。」

水月良？ の相手は、私もする。私は彼と相性が良いみたいだから

な」

そうなのだろうか。良？はすぐに消えてしまったためにそこまで注視することが出来なかったから、わからないが。

健介はコーヒを一口啜って口の中を湿らせると、言葉を続けた。

「私の能力は、まあわかりやすく一言で言えば 《血液操作》だ」

「血液操作？」

「ああ。その名の通り、血を操る。昨日はそれを用いて、血を私の周囲で球状に超高速で巡回させて、杭を弾き碎いたんだ」

なるほど。良？の心象世界には地面が変色するほどの血が染みこんでいたからな。その血を操ったのだろう。

それならば、相性が良いというのも頷ける。

「それじゃあ、食事にしよう。私はこの後すぐに出勤して、この街のどこに良？が潜伏しているかを調べてみる」

「お願いします」

さて。話も終わったことだし、冷めないうちに食べてしまおう。栄養はしっかり摂っておかなくては、回復が遅れてしまうから。

教室に入ると、もう怜治と星雲は登校していた。仲が良さそうにふたり話し合っている。

「おはようさん」

右手を軽く挙げて挨拶した。

怜治たちはこちらを向き、軽く挨拶を交わす。

怜治なんか「おはようハニー。今日もきみは美しいね。その黒いブレザー、とても似合っているよ。思わず白く染めたいほどさ」とか、警察に職務質問あるいは逮捕されかねない軽口を叩いていた。

はつきり言っただけセクハラなのだが、まあいい。仲がよさそうにふたりで話しているのを見て、またおホモだちになってるのかと戦々恐々としていたが、どうやらそうではないようなので、一安心だ。

軽く会話を交わしていると、未来がやってきた。

「よし、席に着け。ホームルームを始めるぞ」

教卓に座ると、朝の挨拶が行われる。

そして未来は本題を口にした。

「さて、今日言うことはひとつだけだ。それは 体育祭について
！」

そう言えば、もうそんな時期か。もう七月に入ったから、そろそろだな。

故が憑依したのは、六月二九日。故が死亡したのも、同月。だから今は七月の頭だ。

この学校では体育祭は中間試験が終わった翌日に行われる。試験は七月二〇日から一週間かけて。その後二日間かけて体育祭。それが終わったら三日休みがあり、一日だけ終業式による登校日があって、夏休みに突入する。

未来はカツカツ！ と無駄に音を立てて黒板に種目を書き、振り向いた。

「この時間中に、どれに参加するのかを決めちゃえよ？ あ、あと、ひとり最低二種目は出るよ？」

黒板にはいくつもの競技が書かれている。百足競争、綱引き、サッカー、男女混合リレー、バスケ、バレー、水泳などなど。

クラスメートたちはそれぞれ仲の良いグループを形成し、話し合っている。

そんな中、未来の声が響き渡った。

「あ、そうだ。俺が可愛いと思う奴は、俺が勝手に出る種目を決めてるから」

そう言いながら未来は黒板に名前を記入していく。

どうやら巨乳はバスケやバレーなど、胸がたゆんたゆんする競技、そしてそれ以外の美乳含めつるべた組は百足競争や水泳などその他の競技に参加するらしい。

「素晴らしいです先生！」

思わず立ち上がり、未来に喝采を送ってしまった。

はつきり言つて巨乳などなんの興味もない。だからそいつらなんてどんな競技に出ようがまったく関係ない。

世の中の男どもは、貧相な体つきは食指が動かないとか、巨乳神降臨キター！とか、あのたわわなお胸様に息子を挟むことキボン又とかなんだと言っているが、真に素晴らしいのはつるぺただと理解できないのだろうか。貧弱なのではなく、美の黄金律なのだよ、あの体つきは。

そして、今未来が記入したもの。

特に水泳の部分。

円を含め、美の黄金律保有者が乱立している。
スキルホルダー

なんて素晴らしい！

水泳と言えば、平泳ぎ（ブレスト）や背泳ぎ（バック）だけではない。たしかにそれも素晴らしい。平泳ぎ（ブレスト）だったら股が開かれて秘密の花園を覗くことができるし、背泳ぎ（バック）ならば水面から浮き出ている薄地の布に包まれた身体の前面が眩しい。だが、それ以外にも。よく見るべきところがある。

それは スタート時！

並んでいるとき、尻に水着が食い込んでいる。その食い込みを見たり、それを直そうと手を入れて水着を引っ張ったりするところは眼福だ。男だったら股間にバベルの塔を建築してしまう。

それ以外にも、実際にスタートしようとしているとき。

上半身を折り曲げると、水着の食い込みがさらに一層深くなる。それを脳内で激写できるんだ。素晴らしい以外の何物でもないだろう。

今まで未来はただの変態だと思っていた。ロリペドでドMな変質者だと。

だが、今こそここに宣言しよう。

彼こそ 次世代の神であると！

「わかってくれるか、水月！」

「はい、先生！ ボキは今初めて、先生のクラスになれてよかった

と思いました！」

故と未来は固く握手を交わして厚い友情を確かめ合う。

そして、誰がどの種目に相応しいか……、そして互いの理想の女性について熱く語り合った。

そして三時限目。

体育の時間であるその授業の担当は、未来だ。

本当なら水泳のはずだったのだが、誰がそうやったのかは知らないが、昨夜未明に何者かが学校内に侵入して、プールの中に鯉を四匹と巨大な亀を二匹、そして某カップラーメンを中身が麺すら入った状態でぶち込んだせいで、プールの授業は中止となってしまった。せっかくのスク水美少女を視姦する時間がなくなってしまったことに故は並々ならぬ怒りを胸に抱きながら体育着に着替えて校庭へと向かった。

「それじゃ今日はマラソンだ。この時間中ずっとだぞ」
いきなり意味不明な発言をした未来。

生徒たちの不満が爆発する。

「ふざけんなよ変態」

「死ね。氏ねじゃなくて死ね」

「漏れは死んでしまうんですたい」

「ふもっふ。ふもっふ」

「あ、先生。俺はこれから（カノッサ）機関の会議があるんですが」
「てめエが走れハゲ」

「くそっ……こんなときに、奴が……疼く……ッ！」

何やら邪気眼使い（ジャキガニスト）が多数発生しているようだ。左手に包帯を巻いて押さえているものがある。

あまりのイタさに目頭を押さえてしまう。きっと彼らは将来このことを思い出して、あまりの恥ずかしさに頭を抱えて転がってしまうだろう。一生忘れられない黒歴史だ。

現実逃避しようと、故は隣にいた工藤麻美（出席番号二四番。短めのポニーが似合っているスポーツ系美少女。陸上部所属）を見る。すると麻美は故の視線に気づいたようで、故を見た。

「はんつ、小童が。何を見ておる」

「あさみん……？」

いったい麻美の身に何が起きたのだろうか。口調がおかしい。麻美は見下すような視線を向ける。

「俺は麻美ではない。俺は闇の女帝、影羅だ」

どうやら麻美には魔族の人格『影羅』が存在しているようだ。影羅は急に高笑いをし出した。

……もうカオスだ。

「コラお前たち！　しつかりしろ！」

未来は、先ほど「奴が疼く」と言って包帯を巻いている左手を抑えていた少年、清水隼人の肩を押さえて揺さぶった。勢いよく。

すると隼人は急に鋭利な雰囲気を漂わせ、左腕で未来を払いのけながらこう言った。

「愚民の分際で……我に触れるな……」

しかし突如隼人ははっとした。

苦しみながら左腕を押さえる。

「つく……し、静まれ……押さえろ、オレの腕よ……怒りを、押さえろ……っ！」

邪気眼使い（ジャキガニスト）たちによる混沌に、もう諦めたのか。未来は溜息をついて、投げやりな感じに言う。

「もういいや。適当に走れ」

発眼（誤字にあらず。邪気眼に目覚めること）していない生徒たちは、だらだらと走り出した。

故は絶対に発眼していないと確信できる円と並んで走る。

「なあ、円。このクラスってこんな奴らばつかなのか？」

「あはは……いつもは違うんだけど、たまに、ね……」

円は力ない笑みを浮かべる。

周囲の光景を視界に入れないように努めて走っていると、急に未来は鼻息荒く故に詰め寄ってきた。

「おい水月！ 頑張れ！ もっと行けるだろう！ 走れ……諦めるなよお　ッ！」

「いや、お前が適当に走れって言ったんじゃない」

朝のホームルームの時に急上昇した故の中の好感度ランキングで未来のポイントが超急降下する。って言うか、むしろ真下に墜落していく。こんなの、桃太　電鉄でキング　ンビーに取り付かれて九个のサイコロを振らされ続けられたときくらいにしか見かけない現象だ。

もはや蛆虫とか夏場に台所とかによく出没する某黒い悪魔とかを見るような冷たい視線を未来に向ける。

すると未来はビクンビクンと震えながら恍惚とした表情で涎を垂らす。

「はあはあ……だめっ、そんな目で見ちゃ……恥ずかしい。でも……感じちゃうっ」

「なん……だと……？」

未来の着ているジャージのズボンの部分に何やら巨大なテントが張られている。

それは天を突かんとそり立っている。

しかも先っぽの方が少し濡れている。

「……」

故は立ち止まった。叫ぶことなく。

そして、さすがは故。慌てることなく努めて冷静にポケットから携帯を取り出すと、おもむろにとある番号をプッシュした。

冷たい機械的な電子音のちが響く。

数回のコールの後、ようやく繋がったようだ。

『はい。警察ですが』

「もしもし、警察ですか？　変質者を見かけました。場所は、市立三笠中学のグラウンドです。なんかアップ系の麻薬キメてトリップ

したような表情してるし、生徒を見る目が某盗撮して捕まったTASIROみたいな目です。あと股間がすごいことになってます」
「あつ……女子中学生（JC）にひどいことを言われた……くふうんっ！」

「あつ、いやっ、やめてっ！ 犯されるっ！ 助けて、警察の人！ コイツ、秘部を大自然に堂々と晒して襲いかかってきます。いやっ、あつ……」

中途半端なところで携帯を切った。まるで襲われたがために、通話が切れた風を装うかのように。

そこでようやく、未来は正気に戻った。

「はっ……ふうんっ！」とびくんびくん悶えていたが、突如として機敏な動きで立ち上がり、凄まじい形相で詰め寄ってきた。

「なんてことをするんだ！」

人生オワタ、ということでも考えたのだろう。タイーホ、な未来が容易に想像できる。

話を流すかのように、努めて冷静に軽く流す。

「冗談ですよ」

「そうか……よかった。私には嫁と三人の子供がいるからな。ここで捕まったらもうそれは人生終了のお知らせだよ」

マラソンが再開された。

故は結構本気で走った。身体はすぐさま乳酸によって重くなり、息が荒くなっていく。

一〇分ほど全力疾走していると、遠くからサイレンの音が近づいてくるのが聞こえた。

その瞬間、故は未来の近くまで歩み寄った。

「どうしたんだ？」

未来は不思議そうに疑問の声を漏らした。

だがそれには応えず、故は行動を開始した。

自分の衣服を破き、身体中に傷をつける。

「ぐっはぁ……っ！」

女子中学生（ＪＣ）の工口い姿を間近で見て、未来は鼻血を吹き出しながら仰向けに倒れた。

本当に鼻血を出す奴なんて初めて見た。故はそう思いながらも、しかし言葉にして口から出すことはなく。腰が抜けたかのように地面にへたり込むと、涙を浮かべた。

天空を仰ぎ見ている未来の息子^{ジュニア}は、まるで神へ挑んでいるかのように大きく、そして雄々しくそり立ち、ビクビクと痙攣している。そしてじわりとその先端が滲んだ瞬間、警察官たちが荒々しい足音を立てながらやってきた。

「犯人確保！」

「要救助者救出！」

未来は両手に手錠をかけられたことで、ようやく事態を理解した。思いつきり唾を飛ばしながら、血走った凄まじい眼をして叫ぶ。

「何をする！ 私を誰だと思ってるんだ、この政府の犬がッ！ 貴様らは国民の税金で飯を食ってるんだ。それはつまり国民の奴隷なんだ！ くそっ、早くこれを外せ！」

「黙れ変態！」

かくして未来はパトカーに詰め込まれ、連行されていった。

残された故は警察官に事情を聞かれ、嘘をついた。マラソンをして呼吸を荒くして身体を熱くさせて頬を赤く染めている生徒を見て興奮した未来が暴走し襲ってきた、と。

痴漢と同じ。このような場合、男の言葉はまったく聞いてくれない。

きっと未来はカツ丼を食いながら、涙ながらに身の潔白を叫んでいることだろう。

あまりの事態の急展開に、その場の生徒たちはみな一様にシンと静まり返っていた。

その後の授業は何事もなく終了し、帰宅の時間がやってきた。

そして故は、今日は円と一緒に帰ることなく、足早に自宅へと戻った。

金を用意し、向かう先は病院。伏岳院が払ってくれたタクシー代を返すためだ。

エントランスから入り、受付に向かって歩いてみると、その道中に通路を歩いている白衣を着た医師を見かけた。

「すみません」

「どうしたんですか？」

医師は立ち止まり、振り返った。

「あの、先日伏岳院先生にタクシー代をお借りしたんで、それを返しに来たんですけれど。伏岳院先生は今おられますか？」

「伏岳院？」

医師は下顎に指を当てて首を捻る。

そんなに考え込むことなどないはずなのに。何をしているのだろうか。

「そんな先生、いないはずなんだけれど」

「は？ いや、いるはずですよ。現に俺の担当医だったんですから」

「……うーん、勘違いかなあ？ まあ私は先日ここに配属されたばかりだから、その伏岳院先生のことをまだ見かけていないだけかもしれないですね」

たしかによく見ると、医師の胸元につけられているネームプレートには、この病院内で日が浅い医師がつけることを義務づけられている若葉マークが装着されている。

ちょうどそのとき、故たちの横を看護婦が通りかかった。

「あ、すみません。こちらの方が、伏岳院先生にタクシー代を返しにいらっしゃってるんですが」

「伏岳院先生なら、中庭におられますよ。お連れいたしましょうか？」

看護婦は立ち止まり、そう言った。

「そうなんですか。それなら、お願いしてもよろしいですか？」

「わかりました。それではこちらへどうぞ」

看護婦はひとつ頭を下げて歩き去っていった。

その後ろをついていこうとすると、医師は頭を掻きながらこう言った。

「いや、すみません。お役に立てなくて」

「いえいえ。この病院は大きいですからね。ここで働くことになって日が浅いのなら、まだ会ったことのない同僚がいてもおかしくないですよ」

「そう言ってもらえると助かります」

故は頭を下げて礼を言くと、看護婦の後を追っていった。

しばらく歩くと、中庭に出た。真ん中に植えられている大きな木の下、芝生が生い茂る地面に木の幹を背に伏岳院が座っていた。胡座を掻いたその脚には、小さな子狐が。どうやら怪我をした子狐に包帯を巻いてやっているようだ。

「ありがとうございます」

故は看護婦に頭を下げた。すると、いえいえ、と軽く返し、看護婦は立ち去っていった。

その姿を見送ると、伏岳院の許へ行く。

「先生。これ、タクシー代です。ありがとうございます」

伏岳院は故に気づくと、包帯を巻く手を止めずに口を開く。

「ああ、別に返さなくてもよかったのに。まあいいか。そこに置いておいて」

「わかりました。それにしても先生、獣医の真似事も出来るんですね」

「獣医？ そんなことは出来ないよ」

「え？ だって子狐を診ているじゃないですか」

そこでようやく包帯が巻き終わったのか。伏岳院は軽く子狐の頭を撫でると、優しく腕に抱き上げた。

そして故を見つめてこう言った。

「故くん。きみには玉藻が子狐に見えるのか？」

「当たり前じゃないですか」

そう、当たり前だ。その小さな姿。ふさふさの体毛。微かに漂ってくる、獣臭。どこをどう見ても子狐だ。

だが伏岳院はゆつくりと首を横に振って否定した。

「いや、違うね。私には可愛らしいお嬢さんにしか見えないよ」

本当に、何が何だかわからない。この世界はどうかしてしまったのではないか？ ……いや、もしかしたら、どうかしているのは自分の方か？

わからない。全然、意味がわからない。

レオが言っていた言葉。嘘と真実の螺旋。混沌なりし世界。

そんな世界で、故は

足掻き続ける

先の見えぬ、無明の闇の中で

円の家に着くと、既に健介は帰宅していた。

「水月良？の居場所がわかったぞ」

健介は一枚の紙を手渡してきた。

何やら持ち出し厳禁と朱書きされているのだが、突っ込まない方が無難だろう。

故はその書類を斜め読みしながら、健介の言葉を聞く。

「そこに書かれている通り、今は第二セントラルホテルの八七六〇号室に宿泊しているらしい」

「よくそんなことわかりましたね」

「街中に設置されている監視カメラの映像を調べ、行き先を特定し、ホテルの従業員に警察手帳を見せて話を聞いてきたからな」

「職権乱用ですね。エロっ！」

故の軽口を華麗に流し、健介はこう言った。

「じゃあ、今日にでも行くか？」

「そうですね。早い方が良いですね。怪我ももう完治しましたし」

そう言いながら、腹を撫でる。そこにあっただはすの瘡蓋さえ既になくなり、綺麗な肌がある。

健介はひとつ頷く。

「そうだな。そうしよう。だが円は連れて行かない方が良いな。円だとなんの能力も使えないから」

「そうですね。あの世界では植物なんて生えていませんでしたから」
カズイクル・ベイ
串刺林 を思い出しながら、そう答えた。

閑話 円とレン

故と健介が第二セントラルホテルへと向かった後。
残された円は玄関を開けた。

その後をついてくるのは、美しい毛並みをした小さな黒猫。首には鈴月の首輪がはめられており、飼い猫であると一目で判断できる。太陽は完全に地に沈み、世界は今、闇の独壇場と化している。

「無事に帰ってきてね、ふたりとも……」

円の炫きは、無限の闇に吞まれて消えた。

だが、この場には聞き届けた者がいた。言葉は話せないけれど、たしかに。

「じゃあ……」

黒猫は円を安心させようと小さく鳴き、円の脚を優しく舐める。

「……」

今にもこぼれ落ちそうだった涙は、たしかにひとつ流れ落ち。されど今円の顔に浮かぶのは、微かな笑み。

円はゆっくりと黒猫を抱き上げると、優しくこう言った。

「そうだね、レン。ふたりなら、大丈夫だよね」

レンと呼ばれた、黒猫は。

ひとつ鳴いて、同意した。

第十一話 〈串刺林〉

夜天に星々が煌めき、月の蒼光は闇に侵された世界を優しく包み込んでいる。まるで、母のように。

眼前に佇む巨大な鉄の巨人。神々へと挑んだ古代の塔のように、遙か彼方まで届いている。

故はエントランスの中に、一歩足を踏み入れた。健介と肩を並ばせて。

ホテルマンが恭しく一礼するのを無視して、奥にあるエレベーターのボタンを押した。

扉が開かれ、エレベーターガールが行き先を訊ねる。

「八七六〇号室」

短く答えると、エレベーターガールは階数ボタンを操作した。

しばらく上昇音を聞き続け、降りる。そして目的の部屋の扉の前で立ち止まり、ドアをノックした。

「入れ」

短い返答。まったく警戒していないと無言に語っている。それほどまでに自信があるのだろうか。

ドアノブを回す。どうやら本当に鍵はかかっていなかったようであるの抵抗もなく回すことができた。

中に入ると、広い室内が虹彩に映し出された。いったい一泊どれくらいかかるのだろう。尋常じゃない値段が必要なのは一目瞭然だ。一目で超高級品だとわかる黒革のソファに腰掛けながら、これまた超高級品だとわかる年代物のワインを楽しんでいた良？は、故をちらりと見ると、喜悦に満ちた歪^えみを顔に貼り付けた。

「やあ、故。パパに会いに来てくれたんだね。嬉しいよ」

ワインをテーブルの上に置く。そして両手をいっぱいに広げて喜びを表現した。

「んなわけないだろ」

「つれないなあ。それじゃあ、どうしたんだい？」

「お前が邪魔だから、殺しに来たんだ……よッ！」

○から一〇〇への超加速。神速で良？へと迫る。

だが視界に入った光景に、故はその足を止めてしまった。

「お前、は……」

呆然と立ち尽くしながら、故は口を開いた。その言葉は揺れに揺れ、力なくかすれかけで。

故の視界の先。指し示された指先にあるのは。

鏡。

「お前は……誰だ？」

故がこんなに茫然自失としている、その理由。

それは、鏡に映った光景が理由だ。

鏡に映った良？は

赤みがかった、茶髪で

顔は似ても似つかないほど、若々しい

別人じゃないか。いったいどういうことなんだ、これは。何か悪い夢でも見ているんじゃないか？ だってそうだろう？ 鏡にはまったく違う人間が映っているのだから。

そんな故に、現実世界の良？と、鏡面世界の良？は、同時に故を向き、優しく、されど決して形が異なっている歪^えみを浮かべながらこう言った。

「パパだよ」

「嘘……だ……」

現実世界の親父はたしかに親父と同じ姿形をしている。だけどどうして鏡に違う姿が映るのだ。

わからない。わからない。全然、わからない。

故の混乱は、止まることを知らず。

……さらに故を奈落の底へ沈めんと、事態が動く。

「故」

突如故の眼前の虚空が歪み、レオが現れた。

レオはスーツを正すと、故に視線を合わせてこう言った。

「彼は彼だ。どちらにでもなれる。お前が今見ている彼も、鏡に映っている彼も……。ふたりとも彼だ」

もう何もかもが信じられない。どうしてこの世界はこんなにも矛盾に満ちているのだ。

思い返せば、幾つもの矛盾が。テレビでの殺人事件の供述もそう。玉藻だって、音遠だって。……それに、たしかレンについても、円は言っていたな。

疑心暗鬼が深まっていく故に、レオは休む間も与えず、追い打ちを掛ける。

「元来ひとりである彼を、お前は、ふたりの別人であると」

「……っ、」

膝をついた。力失い。女子供のように、情けなく。

もう現実が、何がなんだかわからない。呆然とすることしかできない。

「何をしているんだ？ 故ちゃん」

そんな故に、健介は声を掛けた。

「わからないんだ。何もかも」

「さっきから誰と話してるんだ？」

「レオと。あそこにいるじゃないか」

震える手で、故はレオを指差す。

レオは何も言わず、無言のまま佇んでいた。

健介は指し示された方を見る。だがすぐさま故に視線を戻すと、こう言った。

「何を言ってるんだ？ 誰もいないぞ」

「い、いるじゃないか。そこに」

「いない。誰もいないよ」

「そんな馬鹿な。たしかにそこで……」

故はレオを見る。レオは嘲笑にも似た歪みえを見せて、大声で嗤わらっていた。

「...!!」

声なき絶叫が。理不尽な、理解不能なこの世界に、恐怖して。

そんな故に、良？はこう言った。恋人を抱きとめるかのように、

優しく両腕を広げながら。

「ほら、故。どうしたんだい？ 恐いことでもあったのかい？ 大丈夫。パパが抱きしめてあげるから。さあ、おいで」

「う、うあ…… あああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああ」

堪えきれない、故は。

もう、良？にすべてをぶつけることしかできなかった。

走る。走る。走る。風を置き去りにして。

しかし双方の距離は離れているために、故が辿り着くよりも良^ろが指を鳴らす方が一足早かった。

パチンツ。

その音と共に、世界が歪んでいく。

室内の壁に隣接するように最大限の大きさの円に空間が切り取られていく。

それは広さという概念を喪い、明らかに室内よりもずっと広い“

世界”を内部に展開していく。

次第に全貌を顕す、良？の心象世界。

だがそれが完全に姿を現すよりも早く。姿を見せながら、床から出現した杭が故を襲った。

「仕方ないなあ。それじゃあ力尽くでパパのものにしてあげるよ。ふふふつ、パパの手から離れないようにねえ……」

舌打ちをひとつ。そして直角に方向転換し、凶器を避ける。

「故ちゃん、下がってる。私が防ぐから、タイミングを待って決める」

その瞬間、地を這う血痕が意思を持ったかのように健介へと飛んでいく。

それは健介の周囲に深紅の球状と成した。

蜷局とくる巻き神速で旋回するそれは、襲いかかる杭群をことごとく破壊する。

「この程度の攻撃が効くと思うな」

絶対の自信を込めて、健介は言い放った。

たしかに展開された“世界”を上書きできないのなら、行使できる能力は劣化する。いや、その能力によっては、まったく使えないかもしれない。円のように。

だが、それでも。

能力によっては、対等に いや、それ以上に対抗できるのだ。そんな自信を込めた健介の言葉を、良？は鼻で笑う。

「あー、すごいすごい。すごいでちゅねえ」

明らかに馬鹿にしている。健介の額が怒りでびくびくしている。「でも、これだったらどうかな？」

パチンツ。

指を鳴らした。

その瞬間、先日の戦闘とは比較にならないほどの量の杭が群れを成して出現した。

まるで針地獄だ。

ここでは故たちは虫。剣山の中に足を踏み入れてしまった、哀れる小人。

相性の悪い故に避ける術はない。

轟音。

粉塵。

爆発でも起きたかのようなその音に、耳がイカれてしまった。立ち込める煙で、視界も効かない。

そんな煙だというのに、咳き込むことは不思議となかった。

「大丈夫か？」

横から、声がした。

振り向くと、健介が平静に佇んでいる。

「ありがとう」

一言、礼を言う。そして周囲を見渡した。

故と健介を囲むかのように、球状に赤色が展開されている。

どうやら健介がこの鮮血流壁を、ブラッディウォール故をも効果範囲には入れるように広げたようだ。

次第に煙が晴れていく。

そこには、余裕の表情の良？がいた。

「それなら、お前はそこから動けないだろう？」

再びの杭群。

いくら防ぎ続けても、終わりなどない。

圧倒的物量が休息なしに襲い続ける。

いくら最硬の盾とはいえ、無敵ではない。次第に用いられている血液が剥がされ、散っていく。

「クソッ」

ブラッディウォール

健介は鮮血流壁の保持に全力を注ぎながらも、少しでも注意を逸らせようと、散りゆく鮮血に能力を向ける。

その意をくみ、血霧は無数の小型千本と成りて良？に牙をむく。

「そんなものが通用するか」

一部の隙間もないほどに密集された杭群が、故たちと良？の間に

新たに生成される。

分厚い盾となったそれは、暗紅の牙を容易く弾いた。

「くっ、通じないか……。だがお前の攻撃もこちらには通らない」

「それはどうかな」

再び、良？は指を鳴らした。

すると天空から無数の巨大な鉄の車輪が降り注いでくる。

「ここには杭しかないわけではない。お前も見ただろう？ 車輪轆きに処された死体を」

そうだ。

車輪轆きも、串刺しの一部だ。

車輪轆きは鉄の車輪に縫い付けたあと、その車輪に杭を刺して立てる。

それはつまり串刺しに分類される。カテコライズ

ならばこの世界において、杭が出現することしか攻撃方法がないわけではない。

「これに加えて杭群にも襲われたら……。果たして耐えきれるか？」

「う……うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお ツー！！」

再びの、轟音。

凄まじい衝撃に、血壁が歪んでいく。

「……ッ！」

一瞬の空白。音も色も、すべてがなくなった。

そして再び世界にそれらが戻ったときには、健介は力尽きて倒れていた。

「まさか防ぎきるとは……」

良？は初めて尊敬の念を込めて健介を見つめた。

健介は全身全霊を込めて それこそ命を燃やし尽くし、防ぎきった。

その代償として意識を保てないほどに消耗し尽くし、気絶してしまった。

「素晴らしい。ここまで消耗させられるとは……」

荒い息をつきながら、良？は故を見る。

その肩は、激しく上下している。

先ほどの攻撃はかなりの力が込められていたのだろう。それに加えて、今まで圧倒的な物量の攻撃を展開していたのだ。疲労するの
も当然のことだ。

どうする……？

こちらが不利なのは明白だ。能力の相性が悪い。

自分の手札は？

《糸認の魔眼》しかない。自分の保持している脆弱な武器、カッター程度では、いくら戦闘技術があろうとも
使い物にならない。

その程度では、到底叶わない。

さすがにもう圧倒的物量を放出し続けることはできないだろう。

だがそれでも、実際に出現するまで糸を繰るヒトガタを視認できないのは痛い。

それに、武器が少なすぎる。カッター一本。これでは対抗手段が
なさ過ぎる。

「もう諦めなさい、故。パパに敵わないのは、もう十分理解している
だろう？」

さすがにもう余力が残されていないのか、杭は一本ずつしか生成
されてこない。

これなら避けることができる。

だが良？の方へ駆け出そうとすると、疲労も構わずに無数の杭群
を出現させて防がれた。

「くそつ、どうすれば……」

杭を避けながら、呟いた。

すると串刺し死体が眼に入った。

あれなら、使えるかもしれない。

この世界には死体が無数にある。それこそ、掃いて捨てるほど。
ここから一番近いところで、三メートル。

故は杭を回避しながら駆け寄った。

「これなら……」

屍肉を剥ぎ、肋骨を折って八本の短刀と成した。刀と言っても実際に切れるわけない。せいぜい叩いたり、突き刺したりしか。

それでも、使い道はいくらでもある。

カッターを上着の右ポケットに。

両手の指と指の間に挟むようにして、骨刀を備える。

見つめ合う故と良？。

もう交わす言葉などない。

終幕へ向けて全力を尽くすときが来た。

その覇気を受けてか、地から天へと風が吹き荒れる。

それに負けないよう、地を踏みしめる足に力を込める。

「そろそろ終わりでしょう」

ぽつり、と。良？は呟いた。

故はその言葉にゆっくりと首肯する。

「もう故が傷だらけになっても良い。たとえ虫の息であろうとも、生きてさえいれば　それで、十分だ」

本当に、イカれている。

そこまでして故が欲しいのだろうか。

「それは……どうかな」

そうだ。

対抗手段はある。

そして、そのための準備も整っている。

にやり、と口端を吊り上げた。

「そうか」

良？は呟き、笑んだ。

吹き荒れる風に、身につけているスーツがはためいている。血を吸って塊になっている砂が、風に巻き上げられている。

「それじゃあ　」

風が、泣いている。

冷たく、冷たく。悲しいほどに。

「行くぞ！」

砂が、泣いている。

「おおおおおおおおおおおおオオオオオ！」

獣のような咆哮をあげて故は走り出した。

神速。足よ砕けよと全力で。

その意を受けて足の筋肉はブチブチと断裂しながらも風を切り裂いて進む。

良？の指が微かに動いた。

その瞬間、杭群が故を連続的に追尾する。ホーミング

避けることはしない。いや、正確には、大きく回避することを。

目標は既に定まっている。そのためのタイムロスはなるべく少ない方がよい。自分がそれまで保つかわからないから。

だから、回避は最低限に。

致命傷さえ回避できれば重畳だ。ちゅうじやう

「……ッ！」

身体中に杭が突き刺さる。

鮮血は血霧となつて宙を舞い、吹き飛んだ肉片は地に墮ちる。

脳を焼き切らんばかりの痛みに、視界が明滅する。

シャットダウンしようと試みる脳の指令に唇を噛みしめながら必死に反逆する。

そして、ついに良？を捉えた。

骨刀を一本投擲する。

「まだだ」

おそらくは残りのほとんどすべての力を込めたのだろう。まるで古代の城壁のように分厚く何層にも杭群が密集して壁と化した。

全方位を囲うようにして良？を守護している。

それは容易く骨刀を弾き飛ばした。

たしかにこれを破壊するのはほとんど不可能だろう。たとえ、故

頂点にまで届き、一瞬の無重力状態が形成されたのだ。

良？を動かす繰り糸。それを握っているヒトガタには、もう手を伸ばせば触れられる距離。

斬。

迅雷の如くカッターを振り抜いた。

鋭く宙を切り裂いた刃は、いとも容易く糸を切断せしめた。

「ぐ……な、なんだこれはッ！」

突如全身を動かすことが叶わなくなった良？は、地に倒れ伏せて重力をいっぱいに受け止めながら叫んだ。

動けと脳に指令を送り続けている。だがたしかに神経に伝達されているはずなのに、ピクリともしない。

「それが、お前の 死だ」

良？にゆつくりと歩み寄る。

糸の切れた操り人形にできることは、口を動かすことだけ。

「くそッ！ まだ……まだだ！ まだ終わりじゃない！」

憤怒の形相で必死の抵抗を続ける。

だが決してその結果が実ることはない。

故は良？の左側の首筋に刃を当てると、なんの躊躇いもなく鋭く奔らせた。

頸動脈が切断され、まるで噴水のように勢いよく血が吹き出る。

空高く噴き上がったそれは地に降り注ぐ。

びしゃびしゃと全身を赤く濡らし、噴水を顔面で受け止めた故は、袖で拭いながら気絶している健介へと歩み寄る。

主を失った“世界”は死を迎えて消滅し、元の世界へと帰還した

終章 戦いの後

微かな身体の痛みに、目が覚めた。

服を脱いで確認すると、さすがにあれだけの傷を一日で回復させることはできなかったようで、ふさがりかけている傷から血が滲んでいた。

「それでもここまで治るんだから、すげえよな」
ぼつり、と呟いた。

そして首を動かして時計を見ると、七時半。もう食事をして学校へ向かう時間だ。

ミシミシと軋む身体に活を入れてリビングへ向かう。
ドアを開くと、しかし幻覚が見えた。

「.....」

.....
「何事もなかったかのようにドアを閉め、目をこする。そして目頭を揉みほぐした。」

「ふうっ。昨日は疲れたからな。まだ頭が働いてないのか」
ぐいぐいと身体を伸ばして、血行をよくする。

そして一〇回ほど深呼吸して、再びドアを開いた。

「やあ、ハニー。おはよう。寝起きも可愛いね」
「.....」

やはり見間違えではなかったらしい。

怜治はなぜか侍繕家のリビングで堂々と朝飯を喰らっている。

その横に腰掛けている星雲は頭を押さえながら現実逃避していた。

「おい。なぜお前がここにいる」

「はははっ。ハニーのにおいを嗅ぎ取ったからさ」

無駄に爽やかな笑顔を見せる怜治。どのようにしているのだろう、白い歯がきらりと輝いた。

だが、飯を食いながら喋るな。ご飯粒が飛散している。そう思っ

た故は、決して間違いではないだろう。

「なぜ俺までここに連れてこれなきゃ……」

「おいおい星雲。ぼくときみの仲じゃないか」

怜治は星雲の肩に腕を回した。痴漢のようなその手つきは、やけにエロい。

まさかゲイなわけではあるまい。先ほど怜治は故に「ハニー」と言っただ。

「おい怜治。そんなにべたべたくっつくな」

心底嫌そうに星雲は怜治を突き放す。

だが怜治は笑みを絶やさず、いったい何がおかしいのか、本当に嬉しそうにこう言った。

「いやだ」

「どうしてだよ。お前が好きなのは女だろ？」

その星雲の言葉に、怜治は「ふふふ……」ともったいぶったような言葉でこう答えた。

「ぼくは男も女も愛せるからね」

……どうやら何度も女好きとゲイをジョブチェンジしまくったせいで、両刀使いに新たに転職したみたいだ。

エロい手つきで星雲の身体をまさぐる怜治を横目に、故はいつの間にか隣に立っていた円を見る。

「……こいつらなんだ？」

「ははは……一緒に学校に行こうって来たらしいです。お父さんが招き入れたらしいんですけど、もう出勤しちゃったから詳しいことは……」

苦笑しながら答える円。

どこからか「いやッ！」とか「そこはらめえッ！」とか「ひぎいッ！」とか星雲らしき声が聞こえてきたが、耳をぱたりと閉ざして円と会話を続ける。

そしてしばらくすると、異様につやつやとした怜治が故に向かって手招きした。

「ほら。ハニーも朝食にしよう」

「お前が言っな、お前が」

なぜか我が物顔で食事を勧める来客に対して苦笑しながら、席に着く。

ああ。

なんて平和な時間なんだ。

今まで望んで、結局手に入らなかったもの。

一度死んで、生き返って……そしてようやく掴めると思ったら、命を狙われて……。

そしてついに、掴むことができた。この手に。

故は笑う

平和の、中で

終章 戦いの後（後書き）

まだちょっとだけ続きます。

エピソード1 誓い

夢を、見ている

ここが夢の中だと、はっきりと自覚している
明晰夢のように

真つ暗な世界。

何もない。ただ闇に包まれた常闇の世界。

その中で、故は立っていた。

眼前には、少女（故）の姿。

「答え合わせを、しようか」

少年（故）はそう口にした。

少女（故）はその言葉にくすくすと笑む。

「騎士様。ようやく理解したのね」

「ああ」

少年（故）は短く口にした。

頭の中を駆け巡るのは、憑依してからの記憶。

それを確認のように流し、口を開いた。

「おかしいと思ってたんだ。たしかに同じ地球上、同じ年代なのに、
超能力者が居なく、逆に《世界師》^{クリエーター}なんて存在がいる……」

少女（故）は口を閉ざし、耳を傾けている。

少年（故）は瞼を閉じながら　まるで思い返ししながら、確認しながらのように、ゆっくりと言葉を紡いでいく。

「それに、以前見た夢　きみが俺の姿をした騎士人形を抱いている
場面。そして俺の過去をノートに書いている場面。それらを見て、
すべてが終わって　ようやくわかった」

「……それは？」

少女（故）が先を促すように言葉を放った。

少年（故）はそれを受けて、常人なら予想だにもしない　しか

し誰もがみな一度は考えたことがあることを、口にする。

「俺は 俺という人格は……きみの空想なんだな？」

「ええ、そうよ」

くすり、と。少女（故）は笑みをたたえたまま首肯した。

やはりそうか、と。少年（故）は思った。

「そして、この三笠市で起きていた幾つもの奇妙な現象。動物が人間に見えたり、はたまた別人に見えたりしたこと。それも……きみの仕業だ」

それなら理解できる。納得できる。

少年（故）が《^{クリエイター}世界師》であるのに他の《^{クリエイター}世界師》の存在を察知できないのは、自分のみならず周囲にまで自身の能力が及んでいたため、ジャミングのように感覚を妨害されてしまっていたのだ。

いくら少年（故）が自身の能力を見いだそうとしても見いだせなかったのは当たり前だ。

通常《^{クリエイター}世界師》は意識を深く沈み込ませると、自身の能力が自然と頭に思い浮かぶ。それは蜘蛛が生まれた瞬間から巣の張り方を理解しているように、自然なことだ。

だが少年（故）は理解できなかった。それは少年（故）が能力によつて造られた存在であり、それを無意識に知っているからこそ、能力を知ったとき、すべてを知ったときの恐怖から逃れんと無意識のうちに能力がなんだかわからないと自己暗示をかけていたのだ。「たしかにそうよ。あたしは、あたしを助けてくれる騎士様を想像し、創造した。それがあなた。」

その能力の余波を受けて、この街は嘘と真実が絡み合った混沌の世界と化した。

……それで、どうするの？ あなたの過去も記憶もすべてが作り物。あたしの頭の中に作り出された、実体のなきもの。

それを知って、あなたはどうするの？」

騎士人形を胸に抱きながら、少女（故）は訊ねた。

「生きるよ」

短く答えた。

少女（故）が詳細を訊ねるより早く、先の言葉を紡ぐ。

「たしかに俺はきみの空想かもしれない。過去はすべてが妄想の産物で、俺に命なんて存在していないのかもしれない。

でも、俺は今、生きてる。

たとえ過去がきみの空想だとしても。イヴァンが俺に残した呪いは、真実を知ってもなお、俺の中にたしかに息づいている。

それなら、俺は生きるよ。今身体の支配権を握っているのは俺なんだから。きみは奪い返そうとは思えないんだろ？」

「ええ。だってあたしは、あたしを護ってもらうために、あなたを生み出したんですから」

くすり、と。少女（故）は笑んだ。

それを見て、少年（故）にも自然と笑みが浮かんだ。

「そうか。それなら俺は今を生きる」

「そう。あたしはこの中であなたに包まれながら眠っているわ。あなたの世界を、あなたの夢を……、そしてあなたを見続ける」

少年（故）と少女（故）は互いに歩き出した。同時に。反対方向へと。

だが少女（故）は途中で立ち止まると、こう訊ねた。

「……あたしを、護り続けてくれる？」

少年（故）は立ち止まる。

そして振り向き、力強く答えた。

「ああ。死ぬまで護り続けよう。これは契約だ」

少女（故）の肉体を護るということは、つまり少年（故）の命を護ること。

なればこそ、その返答。

それをわかつていて、しかしなおその答えが満足のいくものだったのか。少女（故）は万人が見惚れるような美しい笑みを浮かべた。そして少年（故）に駆け寄る。

「ありがとう……あたしの、騎士様……」

少女（故）は少年（故）の頬に両手を添え、口づけを交わした。触れるだけの幼く儚いキス。一瞬の。

そうして少女（故）は駆け出し。

闇の彼方^{かなた}へと消えていった。

「……ああ。護り続けてやるさ。俺が　生きるために」

少年（故）はそう呟きを残して、闇の此方^{こなた}へと消えていった。

後に残された、この世界は

孤独のまま、過ぎしていく

無人のまま、誰も足を踏み入れることなく

命、尽きるまで

永遠に

エピソード2 伏岳院実清

私はかつて、圧倒的な力に出会った。

西京大学経済学部を卒業し、商社に就職して海外へ渡ったとき。自分なんかより遙かに上位の存在。

彼 水月良？と出会い……、そして友人となった。

どうやら良？は愛娘を大怪我させて監禁し乱暴した罪で捕まっていたらしい。

そして、脱獄してきたとも。

良？は言った。「故の様子を見てきてほしい」と。

良？は脱獄犯だ。隠れていなければならぬ。もしも見つかったら、捕まってしまうから。

だから代わりに私は見に行った。故という名の少女を。

どうやら故は病院に入院しているらしかった。

すぐさま病院関係者すべてに能力を使って故の担当医になりすました。

私、伏岳院実清の能力は《洗脳・操作》だ。

その名の通り相手を洗脳し、思い通りに操作できる。

その能力を用いれば、容易いことだった。

そして伏岳院が担当医になってしばらく経った。

いつものように故を見に行くと、異常な光景に我が目を疑った。

「なっ……どうして四肢が生えてきているんだ？！」

たしかに四肢が切断された状態で故は寝ていたはずだ。昨夜も、その状態だった。

さすがに伏岳院は担当医になりすましているだけであり、手術な

んかできようはずもない。だから接合手術などせず、放置していたのだ。

だがしかし、朝になったら急に四肢が生えてきていたのだ。驚愕するのも無理はない。

「……ん？ ……これは！」

よく神経を集中させて感じてみると、どうやら故は《世界師》^{クリエーター}になつていたようだ。あまりの出来事に平静さを失い、そんなことにも気づかなかつたらしい。

たしかに《世界師》^{クリエーター}の感覚は感じてはいたが、故だとは思わなかったのだ。

「これが故くんのか……？ ……、……！ そうだ、早く再び能力をかけなくては」

手術していないのに四肢が生えた。そんなことがばれたら、大騒ぎになってしまう。

そのため伏岳院は朝から病院内を駆け回ることになった。

それはつまり 『水月故は手術をして四肢がくつついた』と洗脳するのだ。

こうして故が手術をして回復したと、周知されるようになった。

これは、断章

世界から欠落した

人々が忘れ、自分勝手に改変した

真実の、一欠片

「ようやく病院内関係者の記憶の改変は終了したか」

ほっと一息をついて、伏岳院は椅子に腰を下ろした。ぎしりと、椅子は悲鳴を上げる。

「あとは水月故の様子を見守り続けるだけ、か」
そっと目を閉じた。

それから、どれほどの時間が経ったのか

数日か、はたまた数週間か

現世に身を置いていないあたしには、計れない

けれど

「先生。よくもまああれほどの大手術を成功なさいましたね」

「ははっ。神様が味方してくれたんだよ、きつと。故くんを想ってね」

「神様、ですか？ 無神論者の先生がそんなことを言うなんて」

「こんな仕事をしているとね。神の存在に縋りたくもなるさ。……」

それに、神の御業としか思えない奇跡が舞い降りることもある」

伏岳院は、同僚の医師と雑談を交わしていた。話題は、水月故の手術 欠損四肢接合手術について。

本当に、奇跡だ。

成功率は百万分の一もなかったのに。

伏岳院は自身の右手を見る。汗がじつとりと滲んだそれを、歓喜を堪えるかのように強く握りしめた。

（医師となって、一〇年。水月良？と出会って数年。まさかこんなことになるとはな……）

理不尽に失われる命を救うため、死という神の摂理に反逆するために医師を目指し。だが水月良？という強者に出会い、少女を監視することになり。だがその少女の命を救うことになった。

伏岳院は、気づかない

自分が変質していることに

記憶が改変されていることに

少女（故）の能力は、記憶にまで影響を及ぼす

それによって改変した記憶の違和に

伏岳院は、気づくことがない

エピソード3 《幻影顕在化》（了）

あたしは、お父様を尊敬している。

たとえ母にいつも一方的に罵られていても、

黙々と働き続けているから。

故の両親は仲が悪かった。

いつも母は父、良？を罵っていた。一方的に。

だけど良？はそのことについてなんの反抗もせず、ただ黙々と働き続けていた。文句ひとつ言わずに。

そんな良？を故は尊敬し、そして母から庇っていた。言葉の暴力はもちろん、直接的な暴力からも。だが幼い故にすべてを護りきることなど出来ず、良？に逆に庇われることも何回も何回も、それこそ数え切れないくらいにあった。

「あんな男を庇うなんて、やっぱりお前はクズだね」

母はある日、そう言った。

はつきり言つて母には嫌悪感しか抱いていない。だからこそ、そんなことを言われても怒りが増すことはない。既に飽和量を満たしているから。

「ったく。だからお前なんか産みたくなかったんだよ。早く死ぬようにして『故』って名付けたのに、結局死なないし。何考えて生きてんだよ」

それは、自分の名の由来を知った瞬間だった。

一三歳になった。

母と良？の仲直りは、未だ成されていない。いや、そもそもそんなことは不可能なのだろう。母親にその気がないのだから。

最近、世界中である話題がニュースになっている。

それは 流れ星。

かなりの頻度で、流れ星が流れ落ちてくる日が続いているのだ。

世界中で。

そんな話題に世間が賑わっていた、ある日。

母は、良？と故を捨てて家から出て行った。

良？はあんなに罵られていても母のことを深く愛していたようで、ひどく落ち込んだ。

故はそんな良？を立ち直らせようと、必死に声をかけ続けた。優しく、優しく。

今、思うと。

それが、いけなかったのだろう。

良？はもともと自分を責める母から擁護してくれていた故に好意を抱いていた。それこそ、一般的に言う家族愛、親子愛なんていうものよりも、ずっとずっと大きなものだった。

それに加えて、傷心している自分を必死に励ましているのだ。

それらのことがあり、良？は故に恋してしまったのだ。

瞼が、重い。

開けようとしても、重りでも吊しているかのように動かない。ならばこの曖昧模糊とした記憶の中、寝る前に何が起きたのかを故は思い返し始めた。

ただ寝ただけでは、ここまで頭が呆っとしているはずないから。

たしか、昨日は。

お父様と、夜遅くまで話し合ったんだっけ……。

将来の夢とか、くだらないことを、いつまでも。

そこでようやく故は思い至った。

急に眠気が襲ってきて、そのまま眠ってしまったのだと。

しばらく考え込んでいたようで、身体もはつきりしてきた。

今度こそ、と意気込んで瞼を開ける。

すると薄暗い部屋の中、良？の姿が視界いっぱいに映っていた。

「起きたのか、故！」

本当に嬉しそくに、良？はそう口にした。

「うん」と呟き、故は起き上がろうと試みる。だが身体はまったく動かない。

「あれ？ どうして……」

唯一動く首から上を動かし、横を見る。

どうしてか寝間着ではなく、自分は黒いゴシックドレスを着ていた。どうしてか、わからないけれど。

だけど、そんなものよりも、もっとずっとおかしい点があった。それはそこにあるはずのものが存在していなかったことだ。

「あ、れ？ どうして……どうして手足がなくなってるの?!」

「斬っちゃった」

ひどい混乱をしている故に対し、良？は軽そくに。本当に何気ないありふれた話題を口にするかのように、そう言った。

手足が、喪われている。

腕は肘と肩の間ぐらいで切り落とされ、脚は膝と股関節の間ぐらで切断されている。

出血死しないように処置がなされていて、切断面には金属が取り付けられていた。まるで海賊がつけるような、フックのようなものがついたプレートが。

一般人ならそんなことをするのは不可能だ。だが外科医として長年働いてきた良？であればこそ、こんな処置が可能だったのだろう。「なんで……どうして斬ったの?! 返して、あたしの……返してよおおおおオオオ!!」

「だって故がパパから離れちゃうかもしれないじゃないか。ママ冥に、どこか遠くへ」

良？は愛おしそうに故の身体、臍から顎にかけてを指でなぞりながら、言葉を続ける。

狂ったような歪^えみを浮かべながら。

「だから斬ったんだよ。ここから動けないようにね。ほら、動けないだろう？」

手足につけられたフックには縄が伸びている。それにベッドから動けないよう固定されている。

それ以外にも、腹や腰の部分にも、フックとは別に縄が巻かれていた。

「もうこれでどこにも行けないよ。ここで永遠に愛し合おう。ずっとずっと、愛を育もうね、故。死ぬまで」

「いや、いやあ……いやああああああああああああああああああああアアアアアア！！」

良？はチャックを下ろして硬く張り詰めた逸物を露出すると、故の下着をずらし、未だ濡れていない乾ききった蜜壺にねじ込んだ。乾いた粘膜は摩擦に裂けて流血する。それに加え未だ処女であった故の胎内はその証が破られ、そこからも血が溢れている。

手足を喪った恐怖、絶望。そして良？への恐怖やその行為による苦痛などによつて、故は激しい悲鳴を上げた。

自殺することは叶わない。口の中に器具を挿入され固定されているから。言葉を発するのは可能でも、舌を噛み切ることとは不可能だ。今できることは、必死に逃れようと身体を捻らすことのみ。

「ああ、故！ いいよ！ ああつ！」

良？は故を抱く。身体を押さえ、力尽くで。

芋虫のようにぐねぐねと動くことしかできない達磨の故には、逃れることはできなかった。

数週間が経過した。

悲鳴を上げ続けていた故。その声を聞いて通報した近隣住民によ

って、警察は水月家に駆けつけた。

そして良？は逮捕され、故は救助され病院に搬送された。

そして刑務所の中で良？は《世界師》^{クリエーター}となり、脱獄を果たす

入院してから、しばらく経った。

睡眠薬によつて眠らされ、その間に手足を切断されてベッドの上に縛り付けられ、犯され続けた故。すべてに絶望し、泣きわめいていた。

それは入院してからと同じこと。

違う点は、もう涙が涸れ果てたという点^か。

すべてに絶望し、故は空を見上げ続けていた。

手足を切断されたのだ。これから先ずっと自力で歩行したり移動したり……、そんな何もかもが自分ではできなくなってしまったのだ。未来がないことに絶望するのも仕方がない。

心を壊され、ただ壊れた人形のようにずっと空を見上げ続ける故。そんなある日、未だに話題になり続けている流れ星が、堕ちてきた。

そして故に直撃した。

最近話題になっている流れ星。人間に忘れ去られた《妖魔》たちの進化の果て、その精神^{たましい}体。

それによつて《世界師》^{クリエーター}となった故は、すぐさま自分の能力を理解した。

「くふ……ふふっ」

笑みが、漏れる。

ようやく自分は助かるのだ。そうなるのも仕方がない。

「助けて……」

ならば、世界を騙そう。

自分すら。
助かるために。

「助けて……騎士様、あたしの騎士様……助けて……」

あたしの能力は、《幻影顕在化》。

その名の通り、幻影を顕在化させる。

つまりは空想を現実にする能力。

それを用いれば、なんて容易いこと。

自分を護るのも、喪われた四肢を取り戻すのも……なんでもできる。

こうして

少女（故）の空想した騎士　少年（故）はこの身に宿る。
そうすれば、少女（故）の身体は少年（故）のものとなる。

少女を護る騎士は

少女（故）は『この身体は少年（故）のものである。だからこそ欠損なんて存在していないはずの少年（故）の身体に四肢がないのは矛盾している』と世界を騙し、よって手足を再生させた。

生まれた

世界を騙し

少女は眠り続ける

彼女だけの騎士に護られながら

少女は見続ける

エピソード3

《幻影顕在化》

(了)

(後書き)

今度こそ終了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7476y/>

就活の息抜きに書いた小説を載せてみる

2011年11月23日14時53分発行